イタリア語

一　東京外国語学校創立以前

1　日本とイタリア

マルコ・ポーロが空想上の国日本をイタリアに紹介してから三世紀後に、東洋を訪れたイエズス会の宣教師によって現実の日本が伝えられた。さらに、九州の三人のキリシタン大名、大村、大友、有馬が天正少年使節をローマ法王に派遣したが、これが日本人による最初のイタリア訪問である（一五八二―一五九〇年）。この使節はイタリア人の間に我が国に対するかなりの関心を呼び起こし、また、これを企画したヴァリニャーノ神父によって書かれた『ローマ教皇庁への日本使節団』が日本についての情報をある程度普及させたが、四人の少年がかの地で見聞したことを日本に伝えることはほとんどできなかったようである。

それから約三〇年後の慶長年間に伊達政宗がその臣支倉常長をパウロ五世に遣わし、謁見は許されたが、通商は許可されず、帰国した時（一六二〇年）にはキリシタンはすでに厳禁されていた。時とともにイタリアその他の国において日本や日本人についての情報・知識が薄れていったのは、西洋人の興味が失せてしまったのではなく、我が国の

鎖国によってヨーロッパのカトリック世界との関係が断絶したためである。その間、イタリア人宣教師ジョヴァンニ・シドッティが一七〇八年に九州の屋久島に密入国して捕えられたが、江戸の獄中で彼を尋問した新井白石の著した『西洋紀聞』が知識人の間に西欧、特にイタリアについての情報を広めたといわれる。

我が国は一八五八（安政五）年に鎖国政策を放棄して、合衆国およびヨーロッパの大国と通商条約を結んだが、イタリアとの関係が始まったのはそれからやや遅れてからである。養蚕業の不振のため、日本から直接に蚕卵の種紙を輸入する必要から、イタリア政府は軍艦マジェンタ号を日本に向け、艦長V・F・アルミニョンに交渉を委ねた結果、一八六六年にきわめて温和な雰囲気の中で日伊通商修好条約が締結された。その後、特命全権大使岩倉具視一行の欧州視察の折りには、一八七三（明治六）年にイタリア国内を歴訪した。

岩倉のイタリア訪問とちょうど同じ年にヴェネツィアの高等商業学校（現在のヴェネツィア大学）に日本語講座が設置され、駐日イタリア公使館首席通訳官吉田要作が講師に任命された。この初代日本語講師に学んだジュリオ・ガッティノーニはイタリアにおける最初の本格的な『日本口語文典』（*Grammatica giapponese della lingua parlata*, 1890）を著し、一九〇三（明治三十六）年ナポリ東洋語学校に日本語科が設けられ、そこの講師に呼ばれた。その以前すでにフィレンツェのIstituto di Studi Superiori（現在のフィレンツェ大学）にも、一八六三（文久三）年に東洋語学文学講座が新設され、パリで中国語、日本語その他を学んで帰国したアンテルモ・セヴェリーニが教師に任命され、翻訳や著書によって日本文化の紹介に努めていた。

2　伊学協会と日本におけるイタリア語教育の開始

我が国においてイタリア語が学校や大学で教えられ始めたのは、イタリアにおいて日本語の講座ができてからかなり後である。明治初期に来日したお雇い外国人の中にはイタリア人は少数で、しかも芸術関係の仕事に携わる人がほとんどであったが、なかでもひとり司法省顧問として招かれたアレッサンドロ・パテルノストロという法学者がいた。彼は一八八八（明治二十一）年から一八九二年まで滞在したが、その間当時の駐日公使レナート・マルティーノの協力をえて、一八八八年に「伊学協会」を設立し、文部次官辻新次を会長に推した。そして随時講演会を開いたり、機関誌『伊学紀事』を刊行したりした。特に、伊学協会規則の第一条に「本会は本邦と伊国との交際を拡め互いに智識を交換し併せて伊太利語学を本邦に弘布するの目的を以て之を設置す」とうたわれてあり、さらにその付則には「……本会は規則第一条の主旨により目下左の事業に着手す……」として、「第一、本会は高等商業学校に向て伊語の一科を増置せられんことを申請する事。第二、高等商業学校の伊語は同校本科第三年以上に之を置くこととし生徒の望に任せ仏語独語の内一科を欠き其代りに之を修めしむる事。……第六、本会は尚又帝国大学に向て同学生に伊語を修めしむることを申請する事。……」（一八八八年七月九日）と伊語教育の具体案が示されている。

このようにして東京高等商業学校（現在の一橋大学）と帝国大学文科大学（現在の東京大学文学部）において日本で最初にイタリア語の課程が設置されたのである。伊国人エミーリオ・ビンダが東京高商と帝大の伊語教師を兼ねた。『東京高等商業学校一覧』（一九〇三―〇四年版）によると予科、本科とも仏、西、独、伊、清、韓語のうち一語、毎週三時間の授業を受けることになっており、おそらく英語以外に第二外国語として学習させたと思われる。『帝国

大学一覧』（一八九一―九二年版）によれば正課外の随意学科として伊太利語一年間毎週二時間となっている。

二　東京外国語学校伊語学科（新制大学発足以前）

1　イタリア語の教官と学生

一八七三（明治六）年に開成学校から分かれて東京外国語学校が発足した当時は伊語科はなく、また副科目としてのイタリア語のコースもなかった。一八八五（明治十八）年東京外国語学校は廃校となり、一八九七（明治三十）年に東京高等商業学校附属外国語学校が設置されたときも伊語科はなく、第二語学としての伊語のコースは高商のほうに置かれていたようである。一八九九（明治三十二）年東京高等商業学校より分かれて、東京外国語学校が独立した年、上述の七語学科に加えて伊語学科が増設された。当時の修業年限は正科三年、専修科（夜間）は二年であった。最初の年の伊語教官には教授はおらず、講師の伊東平蔵と外国教師アルフォンソ・ガスコおよび嘱託講師（非常勤講師）として吉田秀男が教えていた。最初のうち入学定員は本科が一応二〇名であったが、実際の応募者は一〇名くらいであったらしい。卒業生は四名から六、七名といった状態が第一二回卒業（一九一九年）まで続いている。しかも一九四二（昭和十七）年度入学までは大体隔年毎の募集であった。

最初の伊語教官である伊東平蔵（一八五六―一九二七年）は一八七四（明治七）年頃、旧東京外国語学校でフランス語を学んだ後、ヴェネツィアの高等商業学校に留学した人で、一八八七（明治二十）年から一年間その学校で日本語の講師を務めたこともあった。帰国後、東京外語が独立し、伊語学科が創設されると講師に任命され、翌年教授と

なり、一九一三（大正二）年三月までイタリア語を教えた。伊東平蔵は以前に伊学協会の主事をしていたこともあり、伊語講座のための『伊語教授書』（*Primo libro di lettura per uso degli studenti giapponesi*, 1985）や『伊語読本』（*Avviamento alla lettura della lingua italiana*, 1910）などを著している。もちろん彼以前にもイタリアに滞在し、イタリア語を解する人は何人かいたが、伊東教授は我が国で最初にイタリア語を専門に学び教えた、つまり日本におけるイタリア語学の開祖といえる人である。

イタリア人教師のガスコは当時の在日イタリア公使館の書記官をしていた人で後に神戸の総領事となり、一九三七（昭和十二）年にその地で亡くなった。第二回卒業生で後に教授になった吉田彌邦によると、

> ガスコ先生は青年時日本に来て或る地方の中学校で英語の教師をして居られたので日本人向きの教授法は頗る堂に入ったものであった。……先生は伊太利亜公使館を一人で切り回していた様に見えた程の名通訳官で言葉はチャキチャキの江戸っ子的で教壇でも洒落の連発、……なんでも先生の趣味は落語で寄席の名人といわれる者の芸風にたいしてすら一見識ある批評を加える力を有っていた程の通人であったと聞いた。
>
> （「外語学生時代」、『イタリア』一九四二年九月号）

と追憶して、ガスコの家の書斎には万葉集ほか幾種類かの古典もあって、当時としては稀な日本学に精通した外国人であったと書いている。

嘱託講師の吉田秀男の経歴はよく知られていない。農学士であり、元来伊語の専門家ではないらしいが、一九〇三（明治三十六）年一月まで伊語講師を務めている。「近世初頭のイタリヤ都市－当時の人口論文献より推測されたるヴェネツィアの状態」（『社会経済学史』一九三四年七月号、三〇－四二ページ）、『イタリアの人口論研究－近世人口論の成立に対する其寄与』（日伊協会、一九四〇年）と題した二つの論文があり、後者はレオナルド・ダ・ヴィンチ賞を受賞しており、その当時の肩書は商工省嘱託となっている。

一九〇二（明治三十五）年の第一回卒業生は四名で、そのうち粟田三吾は翌年一月に講師に任命され、翌年九月に助教授、一九一二（明治四十五年）年には教授となって、語学文学を担当し、明治、大正、昭和にわたって在職し、一九三八（昭和十三）年に停年になった後も講師として留まり、終戦直前の一九四五（昭和二十）年七月までの約四〇年の長い間東京外語で教鞭をとった。学究肌の教師で伊語学伊文学の教授・研究に専念した。

第二回卒業生（一九〇四年）も四名で、ツーリストビューローで活躍した石田善太郎や外務通訳生となった浜口光雄のほか画家・作家で著名になった有島壬生馬、粟田とともに伊語科の専任教授として外語に残った吉田彌邦が輩出した。

有島生馬（本名は壬生馬）は有島武郎の弟で、画家、作家、翻訳家として活躍した。たまたま一九一七（大正六）年に文部省が東京外語の校名を「東京貿易殖民学校」と改めることを提示したのに対し、学生はじめ学校当局や先輩のなかから猛烈な反対運動が起こったが、有島先輩が先頭にたって運動を指導し、長期にわたって闘い、改名を撤回させることに成功した。

吉田彌邦は伊語科創設の翌年にひとまず別科に入学している。次いで一九〇〇（明治三十三）年に本科の伊語学科に入学し、一九〇四（明治三十七）年、日露戦争勃発の年に卒業後、しばらく母校の教務課に勤務していたが、一九〇八（明治四十一）年講師に迎えられ、その翌年助教授、一九一八（大正七）年教授に昇進し、粟田教授とともに伊語学科の専任として長年教鞭をとり、一九三九（昭和十四）年に停年を迎え、講師として一年留まった後に退任、イタリアから帰国したばかりの柏熊講師が後を継いだ。粟田が語学文学を専門に教えたのにたいして、吉田は語学のほかに特にイタリアの歴史や政治・経済が専門であった。

日本人の教官としては粟田、吉田両教師のほかに、深澤理三郎（明治四十二年、伊語学科卒業）という人が一九二

二（大正九）年から二三年までの間臨時に伊語の講師を務めているが、それは粟田教授が一九二二年から二三年にかけて、吉田教授が一九二三年から二四年にかけて、文部省在外研究員としてイタリアに滞在していた期間に深澤講師が代講を依頼されたからである。

このように創立以来約四〇年余りの間、二人の日本人の教官と一人のイタリア人教師で本科、専修科及び速成科の語学の授業を担当していたのである。しかし外国人教師はしばしば交代している。時代順に名を挙げてみると、アルフォンソ・ガスコ（一八九九―一九〇一年）、チェーザレ・ノルサ（一九〇一―〇六年および〇八年）、チェーザレ・スコラスティ（一九〇六―〇八年）、ティーモ・パストレッリ（一九〇九―三一年）、カブリエーレ・フォルモーサ（一九三一―三七年）、ジュゼッペ・ビヤジョーニ（一九三七―三八年）、カブリエーレ・サロモーネ（一九三九―四〇年）、ジョヴァンニ・キエーザ（一九四〇―四六年）のほかジュリアーナ・ストラミジョーリがキエーザ神父の後を継いで、新制大学になってからも長年教えた。

有島生馬

学生の修業年限は一九二五（大正十四）年入学までは三年であったが、一九二七（昭和二）年入学から一年延長されて四年制となった。一九四四（昭和十九）年に校名が東京外事専門学校と改められると再び三年制が復活し、一九五一（昭和二十六）年三月にその最後の卒業生を送るまで続いている。その間一九四六（昭和二十一）年三月から一年余り高橋久が講師を務めた。創立後外事

専門学校が廃止されるまでの本科の入学志願者、入学者、卒業者の数は次のとおりである。

	志願者	入学者	卒業者
明治三十二年九月	一四名	六名	七月 〇名
同三十三年九月	一五名	〇名	七月 〇名
同三十四年九月	一五名	一五名	七月 〇名
同三十五年九月	三二名	一七名	七月 四名
同三十六年九月	一九名	一四名	七月 〇名
同三十七年九月	一六名	一〇名	七月 四名
同三十八年九月	〇名	〇名	七月 七名
同三十九年九月	一一名	一〇名	七月 三名
同四十年四月	七名	六名	三月 四名
同四十一年四月	六名	五名	三月 〇名
同四十二年四月	五名	四名	三月 六名
同四十三年四月	七名	六名	三月 五名
同四十四年四月	〇名	〇名	三月 四名
同四十五年四月	二名	〇名	三月 四名
大正二年	三一名	一七名	三月 二名
同三年四月	〇名	〇名	三月 〇名
同四年四月	〇名	〇名	三月 〇名
同五年四月	二六名	一四名	三月 六名
同六年	〇名	〇名	三月 〇名

二　東京外国語学校伊語学科（新制大学発足以前）

同七年	〇名	〇名	三月〇名
同八年四月	二二名	二一名	三月八名
同九年四月	〇名	〇名	三月〇名
同十年四月	文一六名	四名	三月〇名
	貿一六名	一〇名	〇名
	拓一名	二名	〇名
同十一年四月	文一四名	五名	三月三名
	貿二三名	九名	九名
	拓三名	四名	一名
同十二年四月	〇名	〇名	三月〇名
同十三年四月	文四名	九名	三月二名
	貿五四名	五名	六名
	拓一一名	五名	一名
同十四年四月	文二二名	五名	三月三名
	貿一七名	六名	八名
	拓四名	五名	四名
同十五年四月	〇名	〇名	三月〇名
昭和二年四月	文七名	四名	三月七名
	貿五名	八名	三名
	拓〇名	二名	三名
同三年四月	〇名	〇名	三月文三名 貿四名

同四年四月　文三名　六名　三月　拓五名
　　法一〇名　二名　〇名
　　貿二名　七名　〇名
　　拓二名　四名　〇名
同五年四月　〇名　三月　〇名
同六年四月　文三名　三名　三月　一名
　　法八名　三名　三名
　　貿五名　七名　四名
　　拓〇名　二名　三名
同七年四月　〇名　三月　〇名
同八年四月　文三名　二名　三月　二名
　　法六名　三名　二名
　　貿六名　七名　五名
　　拓二名　五名　〇名
同九年四月　〇名　三月　〇名
同十年四月　文四名　一名　三月　三名
　　法二名　三名　三名
　　貿四名　九名　五名
　　拓〇名　六名　〇名
同十一年四月　〇名　〇名　三月　〇名
同十二年四月　文九名　四名　三月　二名

同十三年四月	法	一一名	四名	三名
	貿	九名	八名	七名
	拓	〇名	四名	五名
同十四年四月		〇名	〇名	三月　〇名
	文	八名	六名	三月　一名
	法	九名	三名	一名
	貿	四一名	七名	七名
	拓	二名	三名	五名
同十五年四月		〇名	〇名	三月　〇名
同十六年四月	文	不明	不明	三月　三名
	法	不明	不明	一名
同十七年四月		不明	不明	九月二三名
同十八年四月		不明	不明	九年　〇名
同十九年四月		不明	不明	九月一二名
同二十年四月		不明	不明	九月　〇名
同二十一年四月		不明	不明	三月　九名
同二十二年四月		不明	不明	三月一二名
同二十三年四月		不明	不明	三月一三名
同二十四年四月		不明	不明	三月　九名
同二十五年四月		不明	不明	三月一二名
同二十六年四月		不明	不明	三月一三名

（明治三十二年―昭和十六年は『東京外国語学校一覧』各年度版、昭和十七年―同二十六年は『東京外国語大学同窓会名

簿』［一九九八年］より作成）

右の表で不明となっているのは、第二次大戦から終戦後にいたるまでの資料が欠けているため、志願者や入学者の数がわからないのである。一九一九（大正八）年には各学科が文科、貿易科、拓殖科に分けられ、一九二七（昭和二）年には文科が文学科と法律科に分けられたが、カリキュラムの上での実施は第二学年からであり、それらの卒業生が出たのはさらに二、三年後になっているわけである。

志願者数は第一志望の数であり、年によっては入学者が志願者の数を上回っていることがあるのは、第二、第三志望で入学したか、あるいは第一志望でも同学科内でたとえば貿易科から文科へとまわされることがあったためであろう。特に大正十年代からは入学倍率が高くなり、一九二四（大正十三）年には文、貿、拓合わせて一九名の入学者にたいして第一志望が六九名、第二志望七〇名、第三志望一〇五名であったし、一九三七（昭和十二）年には二二名の入学者にたいして第一志望二九名、第二志望三一三名であった。

以上は本科についてであるが、ほかに専修科（一九〇四年までは別科と呼ばれていた）と速成科とがあった。いずれも語学のみを修めるコースである。専修科は夜学で語学の授業は週に一〇時間あり、二年で修了する。速成科は週に一〇時間以上の授業を受け、一年間で修了する。一九四九（昭和二十四）年にこの二つの科は廃止された。

イタリア語の別科、専修科と速成科の修了者数は次のように記録されている。ただし専修科については一九三〇（昭和五）年以降、速成科については一九四二（昭和十七）年以降の記録が残っていない。

別科

明治三十四年七月一名　　同三十五年七月一名

同三十六年七月一名

専修科

明治四十五年三月一名　大正三年三月一名
大正四年三月一名　同五年三月一名
同六年三月二名　同七年三月三名
大正九年三月二名　昭和四年三月五名

速成科

大正十一年三月十二名　同十三年三月六名
同十五年三月十二名　昭和二年三月六名
昭和三年三月八名　同四年三月六名
同五年三月五名　同六年三月三名
同七年三月三名　同八年三月二名
同九年三月六名　同十年三月三名
同十一年三月三名　同十二年三月二名
同十四年三月六名　同十五年三月四名
同十六年三月六名

（「東京外国語学校一覧」各年度版より作成）

ほかに、陸海軍の委託生を受け入れる選科というのもあったが、一九一一（明治四十四）年から一九三九（昭和十四）年までの間に二〇名の陸海軍将校がイタリア語を学んで修了している。

また、東京音楽学校委託特別修業生（修業年限二年、週六時間）が一名、一九一四（大正三）年に修了している。

本科の授業時間は現在のように一時限が一時間三〇分ではなく、丸一時間であり、専門語学は週に二〇時間くらいであったが、時代により多少増減があった。しかも、一九一九（大正八）年には、第二学年から各語学科が文科、貿易科、拓殖科に分けられ、さらに一九二七（昭和二）年には文科が文学科と法律科に分けられ、語学の時間がそれぞれの科により、また学年によってわずかながら異なるようになった。

一九四一（昭和十六）年度までのイタリア語の毎週の授業時間数は次のように記録されている。

	（一年）	（二年）	（三年）	（四年）
明治三十二年	二四時間	二四時間	二四時間	
同三十三年	右に同じ			
同三十四年	一八時間	一八時間	一八時間	
同三十九年まで	右に同じ			
同四十年から同四十五年まで	二二時間	二二時間	二二時間	二二時間
大正二年から同七年まで	二二時間	二〇時間	二〇時間	
同八年から同十五年まで	文科二三時間	二二時間	一六時間	
	貿易・拓殖科二三時間	二二時間	一四時間	
昭和二年から同十六年まで	文学・法律科二〇時間	一七時間	一五時間	一五時間
	貿易・拓殖科二〇時間	一七時間	一七時間	一三時間

（『東京外国語学校一覧』各年度版より作成）

2　イタリア語教官の専門、業績、活動

明治・大正時代には仏語、独語、露語のように、イタリア語ではなく伊語と言うことが多かったようである。したがって学科名も伊語科とか伊語学科と言われていた。正式には伊語学科であったらしい。一九一一（明治四十四）年には伊語部と改められたが、一九四四（昭和十九）年にはさらにイタリヤ科と改められた。

ところで初代伊語教官の伊東教授は、前に述べたように、最初フランス語を学び、後にヴェネツィアに留学した人である。留学前に彼が日本でイタリア語を学んだかどうかについては記録がない。当時は日本にはイタリア語を教える施設はなかったが、すでにイタリア語を話せる人もいた。東京には一八六七（慶応三）年から明治の末まで二〇人近くのイタリア人公使が交代しているし、公使館には日本人通訳官として吉田要作なる人がいた。一八七五（明治八）年頃からイタリアからのお雇い外国人が来日しており、前述のアルフォンソ・ガスコなども一八八二（明治十五）年に来日し、東京外語で教える以前に公使館書記官を務めていて、数人の伊国人が滞在しており、彼らと接触してイタリア語を習う機会はもちえたと思われる。また、伊東が渡伊する以前にもヴェネツィアに中山譲治という人が一八七二（明治五）年から総領事として滞在し、岩倉具視一行を迎えている。

したがって、伊学協会や東京外語でイタリア語が教えられるようになる以前に対イタリア関係の仕事に携わった人たちは、実際に伊国人と接触することによりイタリア語を習得したわけである。伊東もそれらの人たちのひとりであ

ろうが、しかし他の人たちと違って、語学者であるためには、イタリア語をひとつの言語体系として認識しなければならなかったであろう。ただフランス語を習得していたので、イタリア語への転換は比較的容易であったろうと推測される。伊東はすでに述べた二種類の講読のテキスト以外に著作や翻訳は残していないようであるが、我が国で最初にイタリア語教育に当たった教官として、辞典や入門書の全くない時代に初学者に文法体系を説明し、読み書きを指導することに腐心し、専念したのだと思われるのである。厳しい先生であったらしく、長い文章などを学生に暗唱させることによってイタリア語を実際に体得させる方法もとったようで、伊東に習った吉田彌邦は後年すでに外語を退官してからもそのときの辛さを回顧して、次のように書いている。

暗唱の辛さを思い出す毎に伊東先生の面影が浮かんで来るのである。然し語学者は単に伊文を邦文に訳するだけでは全く実用にならないので、此の如く暗唱の度数が加わる毎に舌の回りも円滑にゆき、外国語での演説、または対話等に際しても、それがどれ程助けになったかは計り知る事が出来ない程である。……この暗唱の辛さも結局よい修業であった事を其後に於て痛感し、……感謝の念禁ずることが出来なかったのである。

（「外語時代」『イタリア』一九四二年九月号）

粟田三吾は語学文学が専門であった。一学年の初級文法の時間には教授自身が作成した自筆の原稿のこんにゃく版をテキストに使用したことがあるそうである。イタリア語初級文法の教科書はまだ出版されておらず、教室で口述筆記させるか、黒板に書いてノートに写させるかするよりほか仕方がなかったのである。しかし独習用の入門書などはいくらか出版されていた。明治時代には、会話の手引き書ではあるが、『和伊仏三国通話』（曲木如長著、續文社、一八七六年）のほか、筆者の調べた限りでは、『伊太利語独習』（山田毅一著、岡崎屋、一九〇八年）だけである。大正期には一冊も出ていないようであるが、昭和に入ってから終戦までの間に十数種の独習書が市販されている。

それらのうち粟田の著した『伊太利語入門　付・不規則動詞』（三省堂、一九四〇年）がある。新書版型の一九六

ページの本であるが、内容は簡潔にまとまっていて、よい参考書であった。一九四一（昭和十六）、四二年頃卒業して兵役に服し、中国大陸の戦場を駆けめぐった先輩たちは背嚢の中にこの小型の本を忍ばせて、暇あるときは取り出して復習したという。筆者が外語生の頃（一九五〇―五四年）にもこの書は市販されており、手頃な自習書として愛用していた。坂本鐵男が外語大の講師のとき、この入門書の中に一か所だけ誤りを見つけている。それは「si.＋他動詞能動態」が受動態として動作主補語をとれることを容認している箇所で、坂本は『東京外国語大学論集　七』（一九二八年）に掲載された論文の中で指摘している。

ほかに粟田には『新編伊語読本』（伊太利亜学会、丸善、一九一三年）や徳尾俊彦と共編の『教科独習用新編伊語読本―独習用伊太利文典略解付』（大阪三島開文堂、一九二八年）がある。ついでながら、徳尾俊彦は当時の大阪外語のフランス語の教授であったが、兼習外国語としてイタリア語も教えていた。大阪外語にはその頃まだイタリア語学科はなく、一九六四（昭和三十九）年に設置された。徳尾教授は他にも『伊太利語四週間』（大学書林、一九三一年）や『イタリー語第一歩』（白水社、一九三四年）などを著している。

粟田は、学習書以外に「中世紀時代の伊太利文学」（『世界文学講座一〇　南欧文学編　伊太利文学の発達とその特質』新潮社、一九三〇年、三五―六四ページ）、「アレッサンドロ・マンゾォーニ」（『世界文学講座一〇　南欧文学編人物研究』新潮社、一九三〇年、一九〇―一九八ページ）、「国語と文学（伊）、一　イタリア語の起源　二　伊文学より観たイタリア語」（『岩波講座　世界文学（伊）』一九三三年、一―三〇ページ）などの著書がある。

これらの著書からわかるように、粟田は初代の伊東教授よりもさらにイタリア語の研究を前進させて、入門語学や講読のみならずイタリア語史・文学史の分野の研究をきりひらいていった。『国語と文学（伊）』では俗ラテン語からロマンス諸語への発展を説明しながらイタリア語の起源について論じ、次いでシチリア派、清新体派とダンテの俗語、

粟田三吾

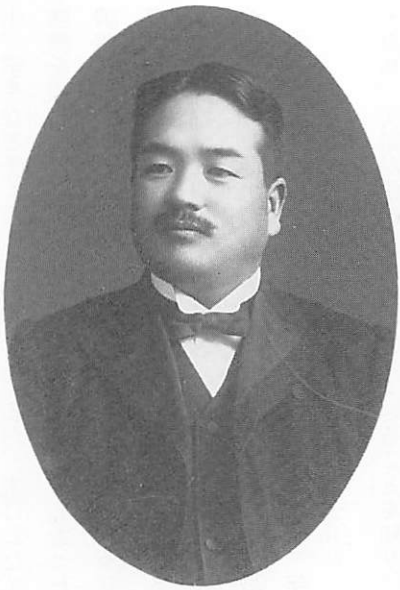
十四世紀の作家とトスカーナ方言の優位性、十六世紀のベンボをめぐる言語論に続いてクルスカ学会や言語の純正主義についての賛否両論、十九世紀のマンゾォーニの言語革新と近代イタリア語散文に至るまでの言語史を文学的観点から概説している。この書や上掲のアレッサンドロ・マンゾォーニについての著作からみて粟田は詩人・作家のうちではダンテとマンゾォーニに最も関心を寄せ、その研究に主力を注いだと思われる。なお、マンゾォーニについて論じた人はまだ当時日本にはいなかったようである。したがって《I Promessi Sposi》(『婚約者』)を読み、それを我が国に紹介したのは粟田が最初であったと言えるであろう。

現在では一、二学年で基礎語学を終えると、後半の二年間の専門課程ではイタリアの文学史、言語史、歴史、思想史、政治、経済などの講義や演習が行われる。しかし戦前では一学年の初級語学が終わると、各先生はそれぞれの専門分野のテキストを用いて原書講読をしながら授業を進め、外国人教師が会話、作文を指導した。粟田は原書を口述しながら書き取り練習をよくさせたそうであるが、教授は口ごもるたちでよく聞こえず、学生はいささか困ったらしい。書き取りはそのつど提出させて、次の授業までに訂正して返してくれたという。

吉田はイタリアの歴史、政治、経済など、いわゆるイタリア事情が専門だった。しかし『イタリー語入門』(太陽堂、一九三九年)や『伊日辞典』(藤堂高紹と共著、伊日辞典刊行協会、一九三八年)など語学の著書も出している。この辞典は、筆者が外語の学生時代(一九五〇―五四年)にも古書として入手できたが、現在の伊和辞典に較べると

語数は少なく、熟語や例文はなく、初級が終わると余り役に立たなかった。このほかにも、吉田著ではないが、『伊太利語辞典』（井上静一著、第一書房、一九三六年）があったが、語数はさらに少なく、学生たちは二年目からはコリンズの伊英・英伊辞典やジンガレッリの伊伊辞典を丸善などから取り寄せる者もいたようである。しかしこの二冊は当時としては貴重品であり、最初の伊語辞典として、その編集も大変であったと思われる。

吉田の学術的な書としては「ニッコロ・マキァヴェルリ」（『世界文学講座一〇　南欧文学編　人物研究』新潮社、一九三〇年、一六〇―一七〇ページ）および翻訳書『君主経国策』（マキャヴェルリ著、吉田彌邦・松宮春一郎訳、興亡史論刊行会、一九一八年）がある。『イタリア史話』（ラジオ新書、一九四〇年）は教授が一九四〇（昭和十五）年六月に一週間にわたってＮＨＫで放送した文章に、付録として「イタリア本土の印象」と題する記事を付け加えて日本放送出版協会より出版されたものである。日独伊三国条約が締結された時代の書として、特に近代の部がファシズムの歴史になっているのはやむをえまい。付録は教授が一九二二（大正十二）年から足掛け二年在外研究員として滞在したときの記録をもとにイタリアの各都市の印象を綴ったものである。



吉田彌邦

吉田は学究肌の粟田に較べるとむしろ実務的であり教務課参与や運動部長を務め、生徒のめんどうみもよかった。在伊中には当時の皇帝ヴィットリオ・エマヌエーレ三世に拝謁し、二時間半にわたって日本の学会のことなどを説明したり、教皇ピオ十一世謁見の機会をえたほか、学者、名

士、学生など多くの人と接触した。また、来日したイタリア人の世話や通訳などで進んで便宜を提供した。ときには講演を頼まれたり雑誌に執筆したりすることもあった。それらは「伊太利の現状」（東京外語創立第二十五周年記念講演、一九二二年）、「イタリー国民思想の新方向及び巴爾幹（バチカン）の近状」（『改造』一九二九年一月号）、「ムッソリーニの演説の印象」（『改造』一九二九年三月号）、「伊太利人と小麦袋」（『政界往来』一九四〇年十一月号）、「今昔」（『日伊文化研究』一九四一年十一月号）、「イタリア語を学んだ頃の思い出――外語学生時代」（『イタリア』イタリアの友の会、一九四二年九月号）などで、政治や時事問題を取り扱ったものが多い。

在外研究で渡伊する前にも、一九一九（大正八）年にイタリア人の商業活動視察のため中国の上海に出張しているが、その地でイタリアの商業会議所会頭などと会談して、伊国と中国との貿易が我が国と中国のそれよりも盛んであるため、工業が伊国の方が進歩していることを知り、また、日伊間の商業・経済上の交流が微々たるものであることを嘆いており、そのことを講演「伊太利の現状」の中で述べている。

外国人教師アルフォンソ・ガスコとチェーザレ・ノルサについては吉田の学生時代を回顧した随筆などに多少記述が見られるが、他の教師についてはほとんど記録がない。ガスコは、すでに述べたように、非常に日本語に堪能な人であったそうで、一八八二（明治十二）年から一九三七（昭和十二）年までの長い間日本に滞在した。

ノルサは吉田が教えを受けた先生で、最初イタリアの海軍兵学校で英語の教師をしていた。スペイン語やロシア語にも通じていたし、和文伊訳が得意であったというから、よほど語学のできる人であったのだろう。ただガスコとは対照的で「自分からは積極的に指導教育せんとする風がなく、怠けたければ勝手に怠けと云うようなやり方であったので、結局我々は自分で調べて其の難解を質問することにした」（前掲「外語学生時代」）そうで、生徒たちはこぞって作文を書いては教卓を囲み、添削をしてもらったということである。

その他のイタリア人教師については、ティーモ・パストレッリがヴェネツィア高等商業学校出身の経済学士であり、ガブリエーレ・フォルモーサはローマ商科大学教授であったということのほかには知られていない。ガブリエーレ・サロモーネとジョヴァンニ・キエーザについてはこの二人に教えを受けた先輩たち（一九三九―四六年頃卒業）に聞き知ることができる程度である。

伊作文や会話を主に担当したサロモーネはナポリの出身で、陸軍中尉であったため、日独伊三国条約が結ばれた一九四〇（昭和十五）年に軍務に復帰するため、着任後わずか一年半で帰国することになった。イタリヤ科の級友たちは金を出し合って日本の短刀を買い、見送った東京駅のホームでせん別に贈ったという。サロモーネはアフリカ戦線に従軍中に戦死したそうである。後任のジョヴァンニ・キエーザはカトリック神父で、北伊はピエモンテ州の出身であるためか、南伊のサロモーネとは違って冷静できちょうめんな性格で、文法や会話のほかに時折ダンテの話などに及ぶこともあった。

3　一九五一年までの卒業生

一九四九（昭和二十四）年に東京外国語大学へと昇格したが、その前年の入学者は一九五一（昭和二十六）年に最後の外事専門学校を卒業したわけである。この卒業生のなかには新制大学へ編入した者もいた。ところで、すでに見たとおり、一九四四（昭和十九）年に外事専門学校と改名されるまでは大体隔年の募集で、学生数もわずかであった。一八九九（明治三十二）年以後一九一九（大正八）年までは卒業生は各年平均四、五名、しかし一九二二（大正十一）年からは一〇名を超え、一九三七（昭和十二）年には一七名、最も多かったのが一九四二（昭和十七）年で二三

名となっている。このクラスは入学者が一六名であったが、前年の留年者が混入したらしい。隔年募集であれば留年すると二年遅れてしまうわけである。

また、そのころは外語イタリヤ科とは関係なく、「イタリアの友の会」という組織があった。この会は雑誌『イタリア』を発行するほか「イタリア語学校」を運営していて、麹町にあった伊太利亜文化会館内に教室をもち、夕方の授業で初級、中級、上級のコースをそれぞれ三か月で修了させる一般人向きの講習会を開いていた。さらに京都帝国大学文学部には以前から特にダンテに興味を抱く学者がいて、一九四〇（昭和十五）年にイタリア語学イタリア文学の講座が設置されている。その少し前の一九三七（昭和十二）年には日伊学会が発足しており、三九年には日伊文化協定が結ばれ、その翌年には明治期から続いていた伊学協会が日伊学会と合併して日伊協会が誕生した。もっとも日伊協会は終戦の翌年、一九四六（昭和二十一）年にいったん解散し、一九五〇（昭和二十五）年に再び設立されている。

大正末期からイタリア語学習者が漸次増加してきたのは日伊間の政治・軍事的関係に触発されたこともけっして否定することはできないが、むしろイタリアについて殊に文学や芸術にたいする関心が人々の間に浸透していったためであろう。伊語学科卒業生の中からは二人の教授のほかに有島生馬、岩崎純孝、下位英一、柏熊達生（本名は宜三）などが翻訳、多数の翻訳や評論、研究によってイタリア文化の紹介に努めた。東京外語のほかにも京都大学文学部やその他の大学および文学者、評論家の間にもイタリア文化や特に古典に興味をもつ人がいたようで、『大正－昭和二十五年期における日伊交流――文献目録――』（日伊協会編、イタリア書房、一九九一年）によるとこの三九年間にイタリア文学に関する翻訳、評論、研究など雑誌に掲載されたものも合わせると概略七八〇点は発表されたことになっている。歴史、思想、芸術に関する出版を加えるとさらに多くなるであろう。

すでに明治時代においてもイタリアに関する研究や翻訳などがかなり出版されており、文学だけに限ってみてもおよそ百点を数える。しかしイタリア文化に関心をもつ人の中には本来は他の分野の専門家であった人もいて、原語からではなく英語やドイツ語などの翻訳や文献を介して著作がなされる場合も多かったと推察される。

ところで東京外語イタリア科の学生の中にも、必ずしも最初からイタリアに関心があって入学したのではない者もいたはずである。そのことは上にすでに挙げたように第二志望の志願者が多かったことからも納得できる。また、卒業後実際に習った語学を使う仕事とか、イタリアと関係のある職につくことは難しいし、実際に卒業生の中でもそれをなしえたのはごくわずかである。ある先輩の話によると、一年生の一学期が終わった頃、粟田教授が「これで大体イタリア語科がどういうところかわかったかと思います。これを続けても卒業して社会に出てどうなるかということはわかりません。やめるなら今やめたほうがよい……」と言ったそうである。

吉田も学生時代を回顧して、

当時伊語科入学のごときはいつも募集人員に不足を告げ、……隔年三、四名しか出なかったのである。之れを今日幾倍の応募者が殺到しているのを見て、かくも世の中が変わったかと感を深くする……三、四十年前に於いては伊太利亜語を学ぶ者は全く一風変わった物好きか何かの様に世間から思われ、伊太利亜語を学ばす親たちまでが学資の用途を知らない者じゃと非難された程であった。今日といえどもまだ伊太利亜の事情がよく我が国に知られていないので此の傾向が全く去ったと云う程ではないが昔日に比ぶれば隔世の感があり、また時には伊太利亜語を学んだ者に対しては着眼がよかったなどとのお世辞すら聞くこともある程である。

（「今昔」『日伊文化研究3』一九四一年十一月）

と書いている。しかしこのようにイタリア語に対して世間の関心が低いのは「決して欧州文明の母体とも云われる伊太利亜の国語の価値に対してではなく、英米独仏のごとき資材を多くもつ国の勢力が圧倒的に日本の市場を壟断し

ていて日伊間に於ける経済関係が稀薄であるためにイタリア語の使用範囲が非常に狭いと云うだけの事なので……」（「外語学生時代」『イタリア』イタリアの友の会、一九四二年九月号）とヨーロッパ文明の源であるイタリアの言語文化に対する人々の評価は高いが、ただ実用的価値が低いだけであると考えている。

そこでこのように実用性の乏しいイタリア語を専攻して、イタリア語学科の卒業生はどのような分野で活躍してきたのであろうか。また実際にイタリアと関係ある仕事についた人はどのくらいの割合であったろうか。左に筆者の知る限りの範囲でそれらの先輩の氏名を挙げてみよう。

［本科の卒業生］

明治三十五年卒業　粟田三吾（東京外語伊語科教授）
明治三十七年　吉田彌邦（東京外語伊語科教授）、有島生馬（画家、作家、翻訳家）
明治四十二年　深澤理三郎（東京外語非常勤講師、イタリア語学校教務主任）
大正八年　高橋　寛（日伊貿易会社）
同十一年　岩崎純孝（翻訳家、評論家）、下位英一（東京外語大イタリア語学科教授、翻訳家）
同十四年　五十嵐仁（翻訳家）
昭和二年　前田義徳（朝日新聞特派員、ＮＨＫ会長、日伊協会会長）、山崎　功（読売新聞特派員、イタリア史研究家）
同三年　柏熊宜三（東京外語大イタリア語学科教授、翻訳家）
同六年　丸　弘（翻訳家）
同八年　奥野吟右衛門（東京外語大イタリア語学科教授、マンゾォーニ研究家）
同十二年　清水三郎治（朝日新聞特派員、翻訳家、日伊協会専務理事）、下村清（外務省、ミラノ総領事）、中村　修（外務省、在ヴァチカン大使参事官）、石井彪（外務省、サンパウロ総領事）

同十四年　大島恒男（三井物産ミラノ事務所長）
同十六年　後藤俊夫（朝日新聞社）、東川一郎（産業経済新聞社）、佐藤弓葵（筑波大教授）、池田茂（三井物産）
同十七年　田辺　健（外務省、ミラノ総領事、日伊協会専務理事）
同二十一年　高橋　久（東京外事専門学校講師、イタリア語学文学者、和伊辞典編集）
同二十二年　池田　廉（大阪外語大教授、イタリア文学研究家）、赤沢　寛（武蔵野音大教授）
同二十三年　木村裕主（毎日新聞特派員、イタリア現代史研究家）、永井三明（同志社大教授、イタリア史研究家）、目方　照（イタリア美術史研究家）
同二十四年　井出正隆（イタリア文学研究家）
同二十五年　植田　寛（上野学園イタリア語講師）、桜井博章（上野学園イタリア語講師）
同二十六年　坂本鐵男（ナポリ東洋大教授、イタリア語学研究家）

［専修科の修了生］

明治四十五年　下位春吉（ナポリ東洋語学校教師、イタリア文学翻訳・研究家）

［速成科の修了生］

昭和九年　坪内　章（英文学・イタリア文学研究家）
同十四年　杉浦明平（作家、イタリア文学翻訳・研究家）

本科伊語学科卒業者職業別一覧（一九三九年五月調べ）

［教育］
大学、高等専門学校三名
陸海軍諸学校〇名
師範学校〇名

［実業］
会社、商店四三名
銀行四名

［自営業］

中学校〇名　商業四名
高等女学校一名　工業〇名
実業学校〇名　農業一名
その他の学校一名　その他六名
［官庁］
一般官公署二五名　新聞・雑誌記者一一名
外務省五名　協会、組合、事務所一二名
大使官、公使官一名　修学二名
領事官四名　兵役〇名
外国官庁四名　死亡一九名
帰趨不明三四名
計一八〇名

『東京外国語学校一覧』（一九三九年）

三　東京外国語大学発足以降

1　発足期　一九四九―一九五六年

名称の変遷

一九四九（昭和二十四）年五月三十一日、新制国立大学のひとつとして、東京外国語大学が、その前身である旧制

官立東京外事専門学校を《包括して》設立された。そのさいに、旧制「イタリヤ科」から、新制「イタリア学科」に、名称は改められた。

念のために記しておくが、さらに溯って、東京外国語学校の時代には、創設時が「伊語学科」であり、ついで「伊語部」に改められた。そして東京外事専門学校学則の付則には「本則ハ昭和十九年四月一日ヨリ之ヲ適用ス」と断ったうえで、次のように記している。「本則施行ノ際従来ノ支那語部、（中略）佛語部、露語部及伊語部ハ夫々支那科、（中略）フランス科、ロシヤ科及イタリヤ科トシ（中略）英語部ハ英米科トス」。

また、東京外国語大学便覧（一九五〇年四月）に記載された「大学の構成」の項では、次のようになっている。「本学に入学させる学生定員は、約三九〇名とし、左の専攻学科に分れる」。すなわち「英米学科、フランス学科、ドイツ学科、ロシヤ学科、イタリア学科（後略）」。

しかしながら、昭和三十年代半ばまでに学生生活を送った者であれば、誰もが、入学試験のときを始めとして、自分の所属を「第二部第二類（イタリア）」と書いた事実を、覚えているであろう。

このような呼称の由来と役割を明らかにするのは、必ずしも容易でない。まず、先にも引用した東京外事専門学校学則によれば、第一章、総則、第三条に次の如く定められている。「本校本科ヲ第一部及第二部ニ分ツ、各部ノ学科左ノ如シ」すなわち「第一部、支那科、蒙古科、タイ科（以下略）、第二部、ドイツ科、フランス科、ロシヤ科、イタリヤ科、英米科」。この場合の分類や順番は、もちろん、学問的理由からではなく、《大東亜共栄圏》などといった戦時下の便宜的理由によるものであろう。

これに代わって、東京外国語大学学則（一九四九年六月一日から施行。ただし、五一年四月一日から施行の改正付則付き）によれば、第一章、総則、第三条に「本学に、次の部及び類を置く」として、より明快な分類が行われてい

る。たとえば、全体は七部に分かれているが、第五部は「イベリヤ、南米圏」を意味するとし、「第一類（イスパニヤ）」と「第二類（ポルトガル）」を設けている。また第七部は「東南アジア圏」と定めて、「第一類（インド）」と「第二類（インドネシヤ）」と「第三類（シャム）」を設けた。

同様にして、第二部は「西欧圏」として、「第一類（フランス）」と「第二類（イタリア）」に分けたのである。加えて、発足期の一〇年間ぐらいは、受験者に第一志望と第二志望を認める習慣があった。第一志望の受験者だけでは、定員数を充足しなかったためである。正確な数値は承知しないが、昭和二十年代の終わりまでは、イタリア専攻（第二部第二類）学生のうち、第二志望による入学者数のほうが、第一志望による入学者数よりも多かったのではないか。しかし昭和三十年代に入ってからは、受験者の総数が多くなったため――筆者の入学した一九五五（昭和三十）年度の定員数に対する平均倍率は確か二四・一であった――第二志望による合格者は激減し、複数の志望制度は、少なくともイタリア専攻（入学者定員は二〇名）に関するかぎり、機能しなくなり、有名無実と化していった。

しかしながら、外見上の倍率の増加は、いわゆる受験戦争の産物のひとつであって、必ずしもイタリア専攻志望者の実質的増加を意味しなかった。加えて、当時は、まだ一期校と二期校のグループ分け制度が行われていて、本学はつねに二期校に区分されていたため、一期校志願者の受皿的側面まで付与されてしまった。このように受験制度に内含された二重のデメリットが、真にイタリア研究を志す者たち――受験生にせよ学部生にせよ――に、決して良い影響を与えてこなかった事実は、反省されねばならなかったであろう。この点の克服がその後の課題となった。

教授陣と教育研究態勢―東京外事専門学校を継承した時期

新制東京外国語大学は旧制東京外事専門学校を《包括して》設立されたため、後者が廃止される一九五一（昭和二

十六）年三月まで、両機関は並存した。新制大学発足期のイタリア学科教授陣は、柏熊宜三（教授）、奥野吟右衛門（助教授）、ジュリアーナ・ストラミジョーリ（外国人講師）の三名であった。

柏熊宜三は、一九〇七（明治四十）年十一月、千葉県に生まれ、一九二七（昭和三）年三月に東京外国語学校伊語部（拓殖科）を卒業。翌二八年四月、外務省留学生試験に合格。同年十一月、ボローニャ大学法学部に入学したが、一九三一（昭和六）年十一月からはローマ大学法学部に転じた。翌三二年八月には留学期間が満了したため、一旦帰国した。が、外務書記生となり、三四年十月からミラノ領事館に、翌年六月からはローマ大使館に、それぞれ勤務し、その間ローマ大学法学部へ転学して、一九三七（昭和十二）年七月に同大学を卒業した。

ついで、一九四〇（昭和十五）年一月に帰国し、外務省本省勤務となったが、同年三月三十一日、東京外国語学校講師嘱託に移った。同日付で、吉田彌邦講師嘱託が退職した後を襲ったためである。そして翌四一年十月一日、東京外国語学校教授となり、一九四四（昭和十九）年四月一日、東京外国語学校が東京外事専門学校と改称されるに伴い、同専門学校教授となった。さらに一九四九（昭和二十四）年五月三十一日、同専門学校が新制東京外国語大学に〈包括〉されるに及んで、同年六月三十日、東京外国語大学教授となった。

奥野吟右衛門は、一九一一（明治四十四）年八月、滋賀県に生まれ、一九三三（昭和八）年三月に東京外国語学校伊語部（文科）を卒業。同年九月、国家経済研究所所員嘱託、翌三四年十二月、資源局調査課に勤務した。一九三七（昭和十二）年十月には企画院調査部勤務となり、翌三八年十二月に、在イタリア日本大使館付陸軍武官室書記としてローマに赴任し、一九四三（昭和十八）年三月には陸軍属として参謀本部付となった。

ついで、一九四六（昭和二十一）年三月に帰国し、同年八月三十一日、東京外事専門学校講師嘱託となった。形式の上からは、四五年七月三十一日付で退職した、粟田三吾講師嘱託の後を襲ったことになる。そして四七年六月、東

京外事専門学校教授となったが、一九四九（昭和二十四）年五月三十一日、同校が《包括》されて、新制東京外国語大学が設立されるに及んで、同年六月三十日、東京外国語大学助教授となった。

ジュリアーナ・ストラミジョーリは、一九一四年、アブルッツォに生まれた。一九三六（昭和十一）年十一月、日伊交換留学生制度の第一回交換留学生として来日、京都大学文学部に籍を置き、日本語と仏教芸術史を専攻して、三八年八月まで滞在した。一旦帰国したのち、国際文化振興会の奨学金により、翌三九年再び来日した。その後は帰国することなく、駐日イタリア大使館やイタリア文化会館に勤務したという。四七年十月一日から、東京外事専門学校イタリア語教師となった。形式上は、同年六月三十日まで「外国人講師」としてイタリア語を担当した、ジョヴァンニ・キエーザの後任である。

ストラミジョーリとの契約は一年毎に更新され、東京外事専門学校と女史との伊語教師としての契約は、一九五〇（昭和二十五）年三月三十一日まで結ばれた。が、同専門学校が《包括》されて東京外国語大学が設立されるや、四九年六月一日付で、それまでの契約が改訂され、東京外国語大学「伊語担任の外国人教師」となった。この契約は毎年更新され、一九五三（昭和二十八）年四月一日からは「イタリア語担任の外国人教師」となり、一九五五（昭和三十）年三月三十一日まで繰り返された。それ以降の契約の実態は定かでないが、一九六四（昭和三十九）年度の途中まで、ストラミジョーリは「イタリア語担任」を引き受けた。

ところで、わずか二名の専任教官によって、第二部第二類（イタリア専攻）の学生たち数十名に語学教育を徹底させ、専門教育を指導し、さらに研究者を養成するのは、至難の業であった。当時は、まだ戦後まもない物資の乏しい時期であり、巷間にイタリア語文献はほとんど見い出せず、いわゆる伊和辞典は存在しなかった。たとえあっても、単語帳もしくは簡単な語彙集の域を出ないものであった。入門語学書や文法書も数少なかった。したがって、困難は、

教える側だけでなく、学ぶ側により大きくのしかかってきた。

幸いに、本学イタリア語関係の学生は明治、大正、昭和と実学を志す人が多く、必ずしも、イタリア語による専門研究を主にしなくてよかった。しかしながら、旧制東京外事専門学校学則、第一章、第一条に示されたごとく「皇国ノ道ニ則リテ海外諸民族ノ諸事情及其ノ言語ニ関スル高等ノ教育ヲ施シ国家有用ノ人物ヲ錬成スルヲ以テ目的トス」から、新制東京外国語大学学則、第一章、第一条に示されるごとく「外国の言語とそれを基底とする文化一般につき、理論と実際にわたり研究教授し、国際的な活動をするために必要な高い教養を与え、言語をとおして外国に関する理解を深めることを目的とする」へと、その存立の目的は大きく変更された。このような新制建学の趣意をどこまで理解し、過去のイタリア研究を反省検討し、未来への展望をきりひらくかが、新制本学の発足期において最大の眼目になるはずであった。以下、これに則して要点を述べてゆく。

東京外事専門学校（三年制）時代には「イタリヤ科」の属する第二部の外国語授業時間数は、原則として年間、第一学年は七〇〇、第二学年は七三五、第三学年は六六五であり、このほかに外事（地理、歴史、民族及文化、産業）が各学年に、七〇、一七五、二一〇時間あった。したがって、前者「イタリア語」に対する後者「外事」の比率は、学年が進むに従い約一〇分の一、四分の一、三分の一へと推移したものと思われる。この「外事」の授業が、東京外国語大学に特有の「事情」講義へと移項したのではないか。

他方、『東京外国語大学便覧』（一九五〇年四月）によれば、新制「イタリア学科」の授業時間数（週当たり）は前期第一学年「初級」二四、同第二学年「上級」二四、後期第三、四学年においては「普通講義」一二、「特殊講義」一二、「演習及講読」一六、「卒業論文」一〇となっていた。また、『東京外国語大学学則』（一九五一年四月一日、改正付則）によれば、「第二部（西欧圏）、第二類（イタリア）」の専攻語学科目は単位数に換算され、次のようになっ

た。前期第一年「初級」一六、同第二年「上級」一四。なお、前期語学は毎週一時間をもって一単位とする。そして後期においては「語文専修」と「国際専修」の両コースに分け、それぞれ「普通講義」八／八、「特殊講義及普通講義」一六／一二、「演習及講読」一六／一二、「卒業論文」八／八、に定めた。なお、後期科目は毎週一時間をもって二単位とする。

なおまた、一九五五（昭和三十）年には、前期語学時間は一年が六コマ（すなわち一二時間）、二年も六コマ、ただし、一、二年合併授業で「事情」が一コマ（すなわち二時間）に変わっていた。ただし、当時は、二名しかいない専任教官のうち、柏熊教授が長期病欠であったため、「二部二類（イタリア）」における特殊な措置であったかもしれない。加えて、何よりも、東京外事専門学校は戦時下の非常事態の只中にあったから、単純な時間数の比較で早計な結論を下すわけにはいかない。にもかかわらず、前身の東京外国語学校（三年制と四年制がある）、旧制東京外事専門学校、そして新制東京外国語大学への推移を振り返るとき、全般として、専攻語学時間数減の傾向は否めないのではないか。

非常時下の戦中と混乱期の戦後にあって、東京外事専門学校で教育研究の指導にあたった専任教官と外国人教師については、先に述べたとおりであるが、この困難な時期を支えた人々についても、ここで言及しておきたい。奥野吟右衛門が一九四六（昭和二十一）年八月三十一日に東京外事専門学校講師嘱託となり、「形式の上からは、四五年七月三十一日付で退職した、粟田三吾講師の後を襲ったことになる」と先に記した。しかし、残された乏しい資料から判断するならば、より正確には、四六年三月三十一日付で、高橋久が講師に就任し、四七年五月三十一日まで在職した。その後（同年六月）、奥野吟右衛門が東京外事専門学校教授に就任したのである。

高橋久は一九二二（大正十一）年生まれ、学業半ばにして海軍に服役。一九四六（昭和二十一）年三月に東京外事

専門学校――以下、外専の略称を用いることがある――第三回卒業生となった直後、同年三十一日付で講師になった。二十四歳に満たない若さであったから、よほど将来を期待されたのであろう。当時の経済状況は混乱の極みにあったゆえ、そのためであったか、一年余で止むなく退職した。その後の高橋の業績については、別に触れたい。ほぼ同年配に、斉藤重孝がいた。一九二三（大正十二）年生まれ、一九三四（昭和十九）年九月、外専第一回の卒業、平明社社長。一九五〇（昭和二十五）年五月から五六年三月まで、非常勤講師として、大学発足時に初級語学の授業を担当し、イタリア語テキストの印刷にも貢献した。

同じころ、非常勤講師をごく短期間（一九五四年十月一日から十一月三十日まで）務めた例に、井出正隆（昭和二十四年三月、外専第五回卒業）がある。詳しい経緯は審らかにしないが、戦後まもない東京外国語大学――以下、外大と略称することがある――発足期を象徴するひとつの事態であろう。その後、井出は先述の高橋久と同様に中学校の教職などを務め、現代イタリア語の翻訳紹介を行った。非常勤講師の待遇は、今日に至るまで劣悪であり、若い研究者養成のための躓きの石になっている。

坂本鐵男（昭和二十六年三月、外専第八回卒業、ついで同二十八年三月、外大第一回卒業）は、一九三〇（昭和五）年三月生まれ。いったん実業界に入り、銀行に勤務したのち、一九五五（昭和三十）年四月から五七年三月まで、非常勤講師となった。同級の窪田富男は、一九五三（昭和二十八）年三月、外大を第一回生で卒業するや、四月から副手となり、一九五五（昭和三十）年四月から翌年三月まで非常勤講師を務め、その後は留学生の教育に専念することになった。

2　成長期　一九五六―一九六六年

名称の変遷

一九六一（昭和三十六）年三月一日の教授会によって、「部類名改正」の提案がなされ、これが諒承された。そして四月から、これまでの「第二部第二類（イタリア）」が改められ、学科名は「イタリア科」となった。ここで看過してならないのは「イタリア語科」とせずに、敢えて「イタリア科」と改称された点である。

発足してまもない新制大学の内部整備の過程にあって、何よりも、狭い意味での《語学校》からの脱却をはかっていたためであろう。そしてこのように言語（イタリア語）よりも地域（イタリア）名を優先させたのには、本学の基盤を《地域研究》に置こうと考えていたためでもある。この時点において、本学がより高度の教育研究機関として、大学院研究科の設立を目指していたことは明らかである。

しかしながら、その実現のためには「イタリア科」の名称ではなお不十分であることが、文部省当局によって示唆され、一九六四（昭和三十九）年四月から、学科名は「イタリア語学科」となり、同時に講座学科目は「イタリア語学・文学」と「イタリア事情」の二学科目が確立した。このとき大学院研究科の基盤は成った。

教授陣と教育研究態勢―東京外国語学校を継承した時期

一九五六（昭和三十一）年五月二十七日、柏熊宜三が急逝した。これによって、緒に就きつつあった新制東京外国語大学イタリア語の教育研究は、大きな屈折点を迎えた。一九五一（昭和二十六）年度から五六年度までの「講義題

目」（ただし、一九五五年度は長期療養のため不記載）によれば、柏熊は前期専攻語学のほかに、後期においては「イタリア文学史」「イタリア作家論」「イタリア憲法論」その他を、例年講じていた。また、柏熊達生の筆名によって、コッローディ『ピノッキオ』（岩波文庫、一九五〇年）、デ・アミーチス『クオレ』全二巻（岩波文庫、一九五二年）、ボッカッチョ『デカメロン』（河出書房、一九五五年）など、翻訳をさかんに公刊していた。まだ四十八歳の働き盛りであり、長命であればどれだけの業績を挙げたであろうか、と悔やまれてならない。

とりわけ、柏熊は法学を専攻した身であるから、文学はいわば専攻外の分野であった。時間が許せば、別の成果を築いたであろう。また、柏熊教授は本来「事情」の担当であり、戦前や戦中には『伊太利案内』（改造社、一九四〇年）や「ブルーノ・ムッソリーニの死」（『イタリアの印象』イタリアの友の会、一九四二年）など、ファシズムを礼賛した著書、あるいは『ムッソリーニ全集』第八巻（改造社、一九四一年）所収の翻訳の業績があったから、後年、それらとの整合性を問われるのが気がかりでもあっただろう。ともあれ、昭和三十年代にイタリア語を学習する者にとって、柏熊達生・高橋久共著『イタリア語入門』（東京元々社、一九五五年）は必携の書であった。

一九五六（昭和三十一）年四月一日付で、下位英一が非常勤講師となり、前期専攻語学を担当した。当初の契約は翌年三月末日までであった。しかし、前述のごとく、五月二十七日に、柏熊教授が急逝したため、九月一日付で専任講師に任命された。

下位英一は、一九〇一（明治三十四）年一月、東京に生まれ、一九二二（大正十一）年三月に、東京外国語学校伊語部（文科）を卒業した。義兄下位春吉（一八八三－一九五四、大正三年、外語専修科修了）は、第一次世界大戦中のイタリアに渡って従軍印象記 Harukichi Scimoi, *Guerra italiana* (Napoli, 1919) その他を著し、イタリアにおける最も著名な日本人であった。下位英一は、一九二三（大正十二）年六月、義兄を頼ってイタリアに私費留学し、ナ

ポリ東洋語学校で日本語を教授し、翌二四年十二月に帰国した。以後、駐日イタリア大使館に勤め（一九二八年六月から四〇年四月まで）、ついで日本放送協会職員（一九四〇年十一月嘱託、四三年十一月正規採用）となり、一九五一（昭和三十一）年一月三十一日に停年退職した。そして同年四月から、東京外国語大学非常勤講師になったのである。

ほぼ一か月遅れて、同年五月十日付で、山崎功も、後期の特殊講義一コマを担当し、「イタリア史」を講じた。山崎功は、一九〇七（明治四十）年二月生まれ、一九二七（昭和二）年三月に東京外国語学校伊語部（文科）を卒業し、読売新聞社に入り、一九三九（昭和十四）年―四六年在伊、一九五六（昭和三十一）年当時すでに論説委員であった。また『現代イタリア史』（岩波新書、一九五五年）その他、著訳書多数もあった。

翌五七年五月には、坂本鐵男が助手に就任した。こうして奥野助教授、下位講師、坂本助手の態勢が整い、以後ほぼ六年間は、これら三専任教官を軸にしてイタリア語の教育研究が進められることになる。なお、外国人講師ジュリアーナ・ストラミジョーリは、当時、秀れたイタリア映画を次々に輸入して話題を集めていたイタリフィルム社社長の業務が多忙になって、休講が続いた。そのために代講がしばしば行われた。代講の任にあたったのは、イタリア人留学生テーティ、ブロッキエーリ、ポレーセなど、また在日イタリア大使館員チリッロである。そして一九六四（昭和三十九）年度の途中でストラミジョーリ講師は退職し、同年十二月からルイージ・ポレーセ・レマッジが、外国人教師に就任することになる。

他方、一九五七（昭和三十二）年度の授業構成は、従来とまったく異なるものとなった。ひとつには、柏熊教授が亡くなって、下位講師がその後を継いだからであり、いまひとつには、奥野助教授が「ローマ大学交換教授」のためイタリアに赴き、代講として次のような非常勤講師陣を後期専攻語学科目に迎えることができたからである。すなわ

ち「現代イタリア文学概論」を清水三郎治（昭和十二年、外語卒、朝日新聞社）が、「イタリア美術史」を摩寿意善郎（東京芸術大学教授、日伊協会専務理事）が、「イタリア語時事問題講読」を吉浦盛純（外務省）が、それぞれ担当した。このほかに山崎功の「イタリア史」と、下位英一の「イタリア文学史」および卒論ゼミナールがあったのである。かつてない多彩な顔触れの教授陣であった。これはもっぱら下位講師の尽力によるものであった。東京外国語学校の学生時代（一九一九―二二年）に粟田三吾教授が二年間、文部省から海外出張を命ぜられたため――なお吉田彌邦教授も入れ違いに二年間出張した――大きな空白を感じた、と述懐していたから。そして自分の授業時間を利用して、外語同窓の三浦逸雄（大正十二年四月末日まで在籍、イタリア文学研究家）や声楽家の鉄能子（ファシズム期の作家アントーニオ・ベルトラメッリ夫人）に講演を依頼したりした。

前列左から二人目より、奥野吟右衛門、ストラミジョーリ、柏熊宜三

こうして、戦前の東京外国語学校に学んだ人びとと、在学生との間に、細ぼそとしたものながら、学問的絆も結ばれた。もちろん外語祭などを通じて、卒業生と在学生との間に、若干の交流はあった。しかし単なる同窓の親睦関係を越えて、日本において唯一のイタリア語による高等教育研究機関であった、本学の長い伝統を自覚し、その再生をめざす機運が生じた。当時、在学生のうちから、このために働いたふたりの名前を、特記しておきたい。伊藤基道（旧姓、張）と西村暢夫の両氏である。

伊藤基道（昭和三十二年、外大第五回卒）は、卒業論文にダンテを選び、おりから指導教官の柏熊宜三教授が病床にあったためであろう、ダンテ研究

を目指していた三浦逸雄の知遇を得て、東京外国語学校時代に氏と同級の岩崎純孝（大正十一年三月、伊語部文科卒）や下位英一講師らが持っていた同好の集まりを、「イタリア文学会」に発展させた。他方で、伊藤基道は東京外国語大学に大学院の設立されることが――もちろん、伊藤のみならず、その必要を痛感していた教官や学生は多かったであろう――不可欠であるとして、その母体となるべき専攻科の開設を要望して、みずから入学して、一九五八（昭和三十三）年度修了者となった。

本学の専攻科は、実質上、一九五七（昭和三十二）年度から開設され、修業年限は一年で、三〇単位以上を修得し、学年末に研究論文を提出しなければならなかった。一九六五（昭和四十）年度の最終修了者まで、総数三一名に達した。が、イタリア語専攻修了者は、伊藤を含めて、二名だけであった。そしてこの専攻科が廃止されるのと入れ替りに、翌六六年四月に大学院外国語学研究科修士課程が設置されたのである。

さて、西村暢夫（昭和三十一年、外大第四回卒）は、四年生（昭和三十年）の夏休みに、在学生有志たちを集めて、国立国会図書館をはじめ、地方帰省者の協力により京都、大阪、神戸の三地区も含めた主だった図書館のイタリア関係の蔵書を調べ、ガリ版刷り一一五ページの『イタリア文献目録』（一九五五年九月）を作成した。もとより不完全なものではあったが、本学の蔵書と併用すれば、当時は相当に役立った。

このような関心の延長線上にあったのであろう。西村暢夫は、都内で中学校の教師をしたのち、一九五八年三月に、川崎市の自宅で、イタリア語書籍の輸入を専門とするイタリア書房を創設し、月刊情報誌『イタリア図書』（発行人、張基道）を出し始めた。そして同年末には神田神保町に事務所を移し、前記の伊藤（張）基道および西村暢夫を中心として、イタリア書房の活動は、本学教官や学生たちの教育研究を強く支えてくれたのである。

イタリア書房の活動とほぼ平行して、イタリア文学会も活発に研究発表を行い、機関誌『イタリア文化研究』第二

集（郁文社、一九五八年）および第三集（イタリア書房、一九六三年）を刊行した。会長を有島生馬（本名、壬生馬、明治三十七年、外語第二回卒）とし、幹事を伊藤基道が引受け、会場は九段の日伊協会――現在のイタリア文化会館はまだ存在しなかった――や上野池之端の教證寺、後にはお茶の水の中央大学会館で行った。教證寺は会員の坪内章（実践女子大学英文科教授、昭和九年、外語速成科修了）が住職を兼ねていたからであり、中央大学会館は矢田一男（中央大学、法学部教授）が会館の理事をしていたからである。会合の常連には斉藤祐蔵（日本大学教授、英文学）や小林英夫（東京工業大学教授、言語学）のごとく他大学の関係者もいたが、主体となったのは、東京外国語学校でイタリア語を学んだ人々であった。

ところで、この時期の教官の異動を示すならば、一九六〇（昭和三十五）年十月から六二年六月まで、坂本助手がイタリア政府留学生としてナポリ東洋大学へ出張した。この間の担当授業の補講は、前年度から非常勤講師の任にあった松本芳郎（昭和二十六年、外専卒、昭和二十七年、外大卒、日伊協会主事）が行った。

前期事情講義、週一コマの担当は、吉浦盛純（外務省）から中村（旧姓稲村）修（昭和十二年、外語卒、外務省）へ、また金倉英一（外務省）から下村清（昭和十二年、外語卒、外務省）へと引き継がれていった。他方、後期特殊講義、週一コマの担当は山崎功（前出）から星野秀利（後にボローニャ大学教授）へ、また戸口幸策（成城大学教授）から松浦保（慶応大学教授）および友部直（共立女子大学教授）へと引き継がれた。

前期事情講義は、いわば、外語時代と外専時代の伝統を外大の授業へ継承したものであり、金倉講師のように専門研究家もいたが、主流は外交官畑の講師陣によって担われた。それゆえ、週六コマの語学中心授業を受ける前期一、二年の学生たちにとっては、「現実のイタリア」について貴重な情報を提供してくれた。先にも触れたが、学生の大多数が実学への志向性をもっていたから、いっそう有益なものと感じられたにちがいない。改めて言うまでもなく、

外語、外専、外大と引き継がれてきた伝統のなかで、卒業生の大多数は、直接イタリアとの関連の有無にかかわらず、実業界や出版報道や外交関係の諸分野で活躍してきたのである。たとえば、池田勲（大正十一年、外語卒）、小林富佐男（大正十三年、外語卒）、前田義徳（昭和二年、外語卒）、赤尾好夫（昭和六年、外語卒）といった群像を思い出していただきたい。

他方、後期特殊講義は、語学文学偏重の後期授業科目のなかで、唯一の社会科学系のものであり、星野講師は「イタリア社会経済史」（一九六〇年度）、「近代イタリア社会史」（一九六一年度）、「イタリア中世都市論」（一九六二年度）と、かつてない重厚な授業を展開したが、イタリア留学のために日本を離れた。これに代わって、長いイタリア留学の経験を持つ戸口講師が、「イタリア音楽史」（一九六三、六四、六五年度）を担当した。音楽や美術を含めて、芸術全般への学生の関心は高く、後年まで、この種の講義が授業科目の一角に組み込まれる伝統を作った。こうして、一九六六年度の後期授業科目に、初めて「イタリア事情」として、松浦講師「イタリア経済論」と友部講師「イタリア美術史」が併立したのである。

ところで、この「成長期」の専任教官の異動は次のとおりである。一九五九（昭和三十四）年九月、奥野吟右衛門が教授に昇任。一九六二（昭和三十七）年四月、坂本鐵男が専任講師に昇任。ただし、同年六月に海外出張から帰国したため、翌年度から担当授業時間が倍増した。同じく六二年四月、下位英一が教授に昇任。翌六三年三月に停年退官した。これに代わって、河島英昭が助手に就任した。

河島英昭（昭和三十四年三月、外大第七回卒業、次いで翌三十五年三月、同専攻科修了）は、一九三三年生まれ。本学に大学院がなかったこの時期、研究者養成のために専攻科が一定の役割を果たした点については、先にも触れた。『東京外国語大学学則』（一九五六年四月）第一〇章によれば「外国語専攻科は、大学において修得したる研鑽を基

として各地域の言語及び文学を、より精深な程度において教授研究し、もってその国の語学文学についての専門的知識技能を有する人材を養成することを目的とする」となっていた。また、「修業年限は、一年とする」とし、「学年の終わりに研究論文を提出しなければならない」と定めていた。河島の場合、指導教官は下位講師であり、提出論文は「ヴェルガ研究」であった。その後、一九六〇（昭和三十五）年度と六一年度の二回、副手を務めた。副手も、大学院がなかったころ、研究者養成のために設けられていた職種で、一応の薄給を与え、半ばは研究室関連の雑務を処理し、残る半ばは研究論文を提出することが課されていた（たとえば『東京外国語大学規程集』第一一「副手に関する規程」一九六〇年を参照）。時の学長岩崎民平から副手の辞令を交付され、河島は六〇年度末には論文「ヴェルガとヴェリズモ」を、また翌六一年度末には論文「近代詩人ペトラルカ」を提出した。

このころ、本学に大学院を設置すべき機運と諸準備が整ってきて、副手も廃止され、研究室関連の雑務だけを処理するものとして、教務補佐員の職が設けられた。一九六二（昭和三十七）年度に、河島はこの任にも就いた。ところで、本学における助手は、三コマの授業を担当するほかに、教務補佐員のいない場合は、不可避的に雑務を処理しなければならなくなる。そのひとつとして、坂本助手と河島副手の記した「イタリア科研究室日誌」（昭和三十四年四月二十日ヨリ昭和三十六年三月十六日マデ）が、偶然に残っているので、往時の一端を思い出すよすがとして、一部を左に引用しておく。

〔昭和三十四年六月十六日〕－坂本助手。

マウリーリオ・コッピーニ駐日伊大使来学。三〇二番教室にてイタリア科学生に対し講演。岩崎学長歓迎の辞。奥野教官より外語大の歴史及びイタリア科の今昔につきイタリア語で説明。学生代表河島イタリア語にて歓迎の言葉。大使の演説（テープにて収録）。学生一同より大使及びドゥランテ書記官に対し「外語バックル・バッヂ」を贈呈。研究室、図書館を

見学後、学長室にて懇談。

［同年七月二十七日］－坂本助手。

コッピーニ大使より奥野教官に申し出のあったイタリア図書の希望リスト作成。

［昭和三十五年六月四日］－河島副手。

日米安保改定条約反対統一行動のため学内騒然。

［同年六月十六日］－河島副手。

昨夜の全学連国会突入死傷事件に対する抗議デモのため、午後の授業は事実上中止。

［同年六月十七日］－河島副手。

三年女子学生M君、国会突入事件（十五日夜）より行方不明。全学教授会。

［同年六月十八日］－河島副手。

M君警視庁に拘留されていることと判明。午前十時、学生と教授団総会、於三〇一番教室。岩崎学長、声明を発表。

午後、M君父兄、NHK記者来たり、奥野、下位、坂本教官と談。二時、奥野教官、総評弁護団へ出張。六時、M君、警視庁より釈放。

［昭和三十六年一月十九日］－河島副手。

午前十時半、コッピーニ駐日伊大使、イタリア文化会館館長ジャッキーノ氏と共に来学。寄贈図書贈呈式を学長室にて行う。奥野教授とストラミジョーリ講師が参席。

なお、このとき、約一〇〇冊の寄贈図書を受け、「コッピーニ文庫」と名付けられたが、その主要部分は、R・リッチャルディ社版「イタリア文学叢書」である。

3　展開期　一九六六―一九九二年

東京外国語学校時代と東京外事専門学校時代を経て、また新制東京外国語大学の「発足期」における後者すなわち外専を継承した時期と前者すなわち外語を継承した時期を経て、「発展期」においては、大学院外国語学研究科修士課程の成立をみた。ようやく制度が整い、イタリアをめぐる諸研究の未来がひらかれることになった。これ以前の研究志願者たちは、旧帝大系の大学院や、新制大学でも一橋大学や東京都立大学などの大学院へ、わずかな活路を見いだすために進学するか、あるいは中学高校などの教職に就いて困難な研究を自力で続けるしかなかったのである。

他方で、現実には、昭和三十年代の後半になると、年々、東京大学をはじめ他大学の卒業生たちが学士入学制度を利用して、わがイタリア語学科一年に編入学する場合が後を断たなかった（ただし、卒業に至るまで就学を継続した者は稀であった）。また、他大学の研究職に身を置きながら内地留学などの制度を利用して、イタリア語学科授業の聴講に来る人も多くなった。

端的に言って、東京外国語大学イタリア語学科の研究教育機関としての価値は大いに高まりつつあったのである。学科の発展は間違いなく約束されていた。その矢先に、いわゆる「大学紛争」が起こって、混迷の渦を乗り切り試練のうちに未来の発展を築き上げねばならなかったのである。それゆえ、この「発展期」を（A）（B）ふたつに分けて述べることにしたい。

展開期（A）　一九六六（昭和四十一）ー一九七四（昭和四十九）年

重ねて記しておくが、私たちイタリア語学科のように、明治大正昭和の三時代にわたって、外語、外専、外大という長い伝統を誇り、日本におけるほとんど唯一のイタリア語による高等教育研究機関において、大学院の設置は念願の的であった。と同時に、新制大学を脱却しユニークな大学として存立するための最初の屈折点でもあった。

この経過は、先に「名称の変遷」においても示したとおりである。そして一九六四（昭和三十九）年四月の語学科名改称によって、その基盤は確立された。紙幅の都合上、詳述するわけにはいかないが、たとえば、一九六五（昭和四十）年度までの後期学生（一九六五年度は四年次学生）は、イタリア語学科の授業科目区分が普通講義、特殊講義、講読、ゼミナールという、やや曖昧な区分をもっていたのに引き換え、一九六六（昭和四十一）年度からは、イタリア語学・文学とイタリア事情の二講座の存在が明示され、卒業論文演習が設けられたのである（ただし、事情講座の教授であった奥野教官だけが卒業論文演習を担当する、という不備は残ったが）。

こうして大学院外国語学研究科修士課程（ロマンス系言語専攻）という立派な制度が整ったわけであるが、それと同時に、学部と大学院とを結ぶ教育研究態勢が、イタリア語学科の場合には、とりわけて重要な意味をもち、試練の局面に立たされることにもなった。

教授陣と教育研究態勢

まず、この前後の教官の異動を、年次を追って示すならば、一九六三年四月、坂本鐵男が助教授に昇任して、大学院新設のための備えが、イタリア語学科の場合、ひとまず整った。修士課程の授業を担当するためには、助教授以上の資格が必要であったからである。しかしながら、翌年十一月、外専時代から一七年の長きにわたって外国人教師を

務めてきたジュリアーナ・ストラミジョーリが帰国のために退任してしまった（後にローマ大学教授）。

これに代わって、同年十二月、日本に留学中であったルイージ・ポレーセ・レマッジが、外国人教師に就任した。ポレーセ・レマッジは一九三三年六月生まれ、六三年に国立ナポリ東洋大学東洋語部日本語科を卒業。同年三月に同大学日本語科助手となり、日本に留学中であった。

こうして、一九六五年十一月には「大学院外国語学研究科設置申請書」が作成され、これに基いて、六六年四月から新設された「ロマンス系言語専攻」のなかにイタリア語学の五コマ（内二コマは学部と共通授業）が開講され、主にイタリア語学・文学を研究する者たちへの進路がひらかれたのである。

この間、一九六五年度イタリア政府特別給費留学生として、イタリア文化会館館長ドメーニコ・ギーオの要請を受け、急遽、河島助手がローマ大学へ出張することになった。学年途中であったため、年度末までの授業時間数を集中講義などで消化し、一九六六年一月に河島は離日した。そして翌六七年四月からの授業開始に間に合わせるため、一九六六年度の給費生活を中断放棄して帰国した。折から、同年四月に専任講師に昇任したので、河島の担当授業時間数も倍増した。なお、研究室の事務を消化するため、小瀬村幸子（昭和三十一年、外大卒）が、一九六六および六七年度の教務補佐員を務めた。

さて、一九六八年度の教授陣と教育研究態勢は次のごとくであった。専任教官は、奥野教授、坂本助教授、河島講師。準専任ともいうべき外国人教師としては、ポレーセ・レマッジに代わって、同じくナポリ東洋大学の日本語科を卒業し、留学生となって来日していたフランコ・マッツェーイ。非常勤講師陣は、ほぼ前年度と同じで、前期事情担当の下村清、後期事情担当の松浦保、後期語学・文学講座担当の松本芳郎、また新たにこれに加わった赤沢寛（昭和二十二年、外専卒、武蔵野音楽大学教授）であった。当時としては、ベストとは言えなくても、ベターな陣容である

と教官の側は思っていた。

念のために、一九六八年度の授業時間割を再現しておく。

前期一年生の履修すべき専攻イタリア語は週七コマ（一コマは九〇分授業）であり、その内訳を担当教官名で示せば［奥野・坂本・河島・河島・マッツェーイ・マッツェーイ・下村］であった。

前期二年生の履修すべき専攻イタリア語は週六コマであり、その内訳は［奥野・坂本・河島・河島・マッツェーイ・マッツェーイ］であった。

後期三、四年生のための授業科目は、イタリア語学・文学とイタリア事情に大別され、前者の講義題目は次のとおりであった。イタリア語作文演習（坂本）、イタリア現代文学講読（河島）、イタリア近代文学講読（河島）、イタリア史講読（松本）、イタリア演劇講読（赤沢）、イタリア文化史講読（マッツェーイ）、イタリア語史（坂本）、イタリア文学史（奥野）、アレッサンドロ・マンゾォーニの改宗（奥野）、それに他学科と共通授業であるラテン語初級（八木）があった。また後者すなわち事情の講義題目は次のとおりであった。イタリア事情特殊研究（松浦）、イタリア経済論（松浦）、それにイタリア美術史（友部）があった。

このように一九六八年度の授業カリキュラムの実態を記したのには理由がある。ほかでもない、この年の秋から、いわゆる「大学紛争」が激化し、「団交」が繰り返され、多数の学生たちから、イタリア語学科のカリキュラムをめぐって、数々の異議申し立てがなされたためである。

東京外国語大学の「紛争」は、周知のように、学寮問題から始まった。「〇管規」、「負担区分」の撤廃などを呼号され、教官は研究者と教育者であるだけでなく管理者でもある、という実態があぶり出されたのであった。けれども、イタリア語学科の場合、微量に政治的な寮問題は、ほとんど口実にすぎなかった。いわゆるセクトに所属した学生が、

イタリア語学科には、ほとんどいなかったためでもあろう。

学生たちの異議申し立ては、大別して、授業内容にかかわるものと、カリキュラムの決定をめぐるものとになった。前者は授業の質の問題であった、と言ってもよい。たとえば、イタリア語の教授法が、あまりに経験主義的であり、非体系的であって、東京外国語大学の授業と巷の会話学校との質的差異がどこにあるのか？　たとえばまた、イタリア語で文学作品を読めば文学の授業になるのか？　イタリア語で歴史の文献を読めば歴史学の授業になったり、イタリア語で書かれた文化史の文献を読むだけで文化史を論ずることになるのか？

学生たちが表明した、授業の質に対する不満は、率直なものであった。わかりやすい例なので挙げておくが、羽仁五郎『都市の論理』（勁草書房、一九六八年）が好んで読まれた頃のことである。羽仁五郎が――その当否は別として――ルネサンスを、ミケランジェロを、マキアヴェッリを、クローチェを論じているのを、学生たちは承知していた。

たしかに、外語、外専、外大と承け継がれてきたイタリア研究のアカデミズムは――もしもそれがあるならば――襟をたださねばならないときにさしかかっていた。一部の例を挙げておこう。吉田彌邦（前出）の『イタリア史話』（ラジオ新書、一九四〇年）や柏熊達生（前出）の『伊太利案内』（改造社、一九四〇年）は、ファシズムに対してあまりに批判精神を欠いていたし、温厚な人物であったにもかかわらず下位英一（前出）が、また文学的感受性の豊かな持ち主であったにもかかわらず坪内章（昭和九年、外語速成科修了、秋吉叡西の筆名で訳詩集『風と影と』山喜書林、一九三五年がある）が、そしてまた当然のことのように柏熊達生（前出）が、『ムッソリーニ全集』第八巻、第九巻（改造社、いずれも一九四一年）の翻訳に参画してしまい、後年になって言及しようとしなかった事実である。東京外国語大学が真の発展期を迎えるためには、このような過去の事実に私たちの眼を閉ざしてはならないであろう。

他方で、有島生馬をはじめ、ファシズムに対して一定の距離を保ち続けた文学者たちがいた事実も忘れてはならない。たとえば、杉浦明平（昭和十四年、外語速成科修了）の場合を思い出しておこう。杉浦は一九三六（昭和十一）年に東大国文科を卒業し、十五年戦争の真只中でルネッサンス研究を志し、三八年四月二日、東京外国語学校の速成科に入学し、三九年三月十六日に修了した。「一年間の一回二時間の夜学に忠実に通った。本郷菊坂の下宿から外壕の外語学校のバラック（今の近代美術館あたり）まで約三キロ歩きながら、動詞の変化や単語を暗誦しながら歩いたものだった。ともかく私のイタリア語の勉強はこの約一年間だけだった」（杉浦明平訳『ミケランジェロの手紙』岩波書店、一九九五年、六四七ページ）、と後に述懐している。

その後、杉浦が「独学」を続けながら、ダ・ヴィンチ、コンパーニ、サッケッティなどの諸訳を刊行し、他の人びとに先んじて『ルネッサンス文学の研究』（増補版、未来社、一九六六年）をまとめたことは、広く知られていよう。日本においては十五年戦争、イタリアにおいてはファシズム期という暗い時代に、杉浦が困難な研究を進めた事実は、「大学紛争」の季節にこそ、検討されるのにふさわしかった。

学生たちの異議申し立てが大別してふたつあることは先に述べたが、後者すなわちカリキュラムをめぐっては次のような問題が生じた。まず、学生側の要求に応えるべく、一九七〇年度以降に、新たに非常勤講師陣に迎えることができたのは、佐野敬彦（東京芸術大学大学院修了）、北原敦（東京大学助手）、山口浩一郎（上智大学助教授）、清水廣一郎（東京教育大学講師）、竹内啓一（一橋大学助教授）であった。なお（　）内は当時の本務校と地位。しかしながら、望ましいカリキュラムをめぐって、教官側と学生側との話し合いが進められるなかで、暗礁に乗り上げた部分もあった。ひとつはカリキュラムの作成にかかわる人事権は主任教官の手にある、と奥野教授が主張したためであった。

しばしば平行線をたどった話し合い、もしくは「団交」のなかで、大学執行部側の責任者として出席した石山正三学生部長の尽力により、問題解決のための筋道はつけられた。すなわち、「主任教官という制度は存在しない」ことが言明され、したがって人事権は特定の個人が持つものではなく、結局、なるべく民主的な話し合いによって授業担当の候補者を選び、教授会が形式上はこれを最終的に決定する、というごく平凡な結論に、やっと達した。重ねて記しておくが、石山学生部長は真摯に学生たちとの議論に応じて、暴力問題が発生してしまった。一九七〇年二月、奥野教官の授業のさい、簗田長世学生課長にふるわれた暴力事件。一九七三年九月、松浦教官の授業のさいにふるわれた暴力事件など。また、一九七一年度末に、竹内教官から出された問題――落ち着いて授業ができなかったために受講者の単位認定に至れなかった件――に関しては、授業実施の環境を整え切れなかった不備を陳謝するために、専任教官として奥野と河島が、一橋大学の竹内研究室へ赴いた。

イタリア語学科の「紛争」が長引いた別の理由に、坂本教官の不在があった点も、記しておかねばならない。折悪しく「紛争」の発生と重なってしまったのだが、そのころ、ナポリ東洋大学との教授交換の話し合いが整ってきて、第一回目に、坂本教官が出張することになった。一九六九年度の「講義題目一覧」を見れば明らかなように、四月の段階ですでに坂本教官の担当題目はなくなっている。が、「紛争」のために、海外出張の承認は七月に遅れて、坂本教官の出発は同年十一月になった。出張期間は一九七一年四月までであった。そして同七一年度の「講義題目一覧」には、最小限度の授業科目として、語学概論一コマと卒業論文演習を設定した。が、坂本教官は結局、帰国することなく、同年十二月三十一日をもって退職した。

この間、専任教官は奥野と河島の二名だけであり、いささか過剰な授業時間数を背負って対処したわけであるが、

学生の側からみればあまりにも片寄ったカリキュラムの内容と映ったにちがいない。ましてや、大学院の授業においては、その感が強かったであろう。なお、一九七〇年五月から河島は助教授に昇任していたが、大学院の授業を担当していなかったために、これもカリキュラム問題の火種のひとつになっていた。ともあれ、坂本鐵男の後任――イタリア語学担当――を急いで決めなければ、学科全体の授業計画に支障を来たすことは明白であった。残された専任教官、奥野と河島は、協議を重ねて、すでに京都での学究生活を固めていた秋山余思に枉げて上京を承諾してもらったのであった。

秋山余思（昭和二十九年三月、外大第二回卒業）は、一九二九（昭和四）年十一月生まれ。一九五四（昭和二十九）年四月、京都大学大学院研究科修士課程に進み、一九五六（昭和三十一）年三月、同課程を修了。続いて同博士課程に進んで、一九五九（昭和三十四）年三月まで同課程に学んだ。その後、翌六〇年十一月から六二年六月まで、イタリア政府給費留学生としてミラノ大学へ赴いた。帰国後、一九六五（昭和四十）年四月から六八年三月まで、京都大学文学部助手を務め、同年四月、京都外国語大学講師に就任、翌六九年四月、同大学助教授に昇任した。発表された研究論文は主にマンゾォーニやダンテにおける言語の問題であり、著書に『白水社カセットブックス入門イタリア語』（白水社、一九七一年）などがあった。

一九七二年（昭和四十七）年四月、秋山余思助教授を迎えると同時に、外国人教師がフランコ・マッツェーイから、同じくナポリ東洋大学を卒業して留学していたマリーザ・ディ・ルッソに代わった。非常勤講師陣も入れ替わって新たに河野穣、重岡保郎、濱谷勝也の三名を迎えた。カリキュラムをめぐる混乱はなお若干続いたが、一九七四年三月、奥野吟右衛門が退官し、名誉教授になってからは、まったくの平常に復した。

展開期（B）　一九七四（昭和四十九）―一九九二（平成四）年

イタリア語学科の「紛争」が長引いていくつかの試練を乗り越えたことは、この時期に耐えた学生たちや教官にとって、必ずしも負の部分を意味するだけにはならないであろう。実社会に活動する者たちは、必ずや、より強固な意志と思想の持ち主になっているであろう。ただ、この時期に学んで、研究者を志した者たちは、虚しく失われた時間を回復させるために、並々ならぬ努力を要請されたはずである。その過程がこの発展期（B）に反映していった、と考えておきたい。なぜならば、もはや一人ひとり、数えあげて、説明できないほどの研究者や翻訳家たちが、イタリア文化の諸分野において輩出しつつあるから。

教授陣と教育研究態勢

一九七四（昭和四十九）年四月、専任教官秋山（語学担当）と河島（文学担当）は、イタリア語学科の発展を期して、新任教官（事情担当）を選ぶ作業に入った。そしてようやくのことで在野の研究家上村忠男の研究業績を見出したのである。当時、上村は富山県小矢部市に住んでいて、遠方ではあったが、教歴の実績を経るため、一九七五（昭和五十）年四月から半年間、非常勤講師を担当した。この結果、同年十月、専任講師に就任した。

上村忠男（昭和四十年三月、東京大学教養学部教養学科卒）は、一九四一（昭和十六）年十二月生まれ。六五年四月、東京大学大学院社会学研究科国際関係論専門課程に進み、一九六八（昭和四十三）年三月、同修士課程を修了。ヴィーコ、クローチェなどの研究家であり、訳書にルッジェーロ・ザングランディ『長い旅』（サイマル出版会、一九七三年）があった。

この頃の非常勤講師陣について簡略に述べるならば、秋山教官が関西から来たのを契機に、集中講義によって、森

田鉄郎（神戸大学教授）、池田廉（昭和二十二年、外専卒、大阪外国語大学教授）、清水純一（京都大学教授）、永井三明（昭和二十三年、外専卒、同志社大学教授）、荒谷次郎（昭和三十年、外大卒、大阪外国語大学教授）その他を迎えることができた。

また、近隣の諸大学からは、平川祐弘（東京大学教授）、米川良夫（国学院大学教授）、菅田茂昭（早稲田大学教授）、田辺敬子（昭和三十七年、外大卒、東京都立大学助手）その他の方々に出講を迎いだ。イタリア語学科における最初の日本人女性教官は、後年に埼玉工業大学教授になった田辺敬子である。また、話はやや前後するが、一九七五年四月から、マリーザ・ディ・ルッソが客員教授の身分になった。なおまた一九七〇年代から八〇年代へかけて、女子学生の入学者数が増大していった。

さて、秋山・河島・上村の専任三教官が揃い、語学・文学・事情の教育研究態勢も整った。この時点で、イタリア語学科の学生定員一〇名の増募が図られ、一九七九（昭和五十四）年度から実施された。また、これに伴う教官定員増により、教授一、助教授一の増加が認められた。

先に、一九七五（昭和五〇）年四月、奥野教授の後を継いで、秋山余思が教授に昇任した。そしてこのとき、教官定員増に伴って、一九七九年四月、河島英昭が教授に、また上村忠男が助教授に、それぞれ昇任した。と同時に、二名の新任教官を採用しなければならなかった。協議の結果、事情担当の教官一名と文学担当の教官一名を募集することになり、審議を重ねて、最終的に、一九八〇（昭和五十五）年度から高下一郎と林和宏の就任が決まった。

ここで定員増に伴う専任教官の教育研究態勢を整理しておく。すなわち、イタリア語学科は、一九六六（昭和四十一）年度から七八（昭和五十三）年度まで、イタリア語学・文学とイタリア事情の二講座であったのが、定員増に伴い、一九七九（昭和五十四）年度からは、イタリア語学とイタリア文学とイタリア事情の三講座に分かれたのであっ

た。そして一九八〇（昭和五十五）年度から、それぞれの講座の専任教官は、秋山教授（語学）、河島教授（文学）、林助手（文学）、上村助教授（事情）、高下講師（事情）となったのである。

また、大学院関係では、一九七七（昭和五十二）年度から、地域研究研究科修士課程が設置されていたが、七九年度には上村教官の助教授昇任に伴い、従来の外国語学研究科との共通授業として、一コマが設けられた。さらにまた、外国人教師関係では、客員教授のほかに外国人講師の採用が認められ、カルロ・キエーザ（外語から外専時代の外国人教師ジョヴァンニ・キエーザの甥）その他を迎えることになった。

ところで、一九八〇（昭和五十五）年度から専任講師に就任した高下一郎（昭和四十六年、京都大学法学部卒）は、一九四八（昭和二十三）年十二月生まれ。京都大学大学院を経て、同大学法学部助手。論文に「カルロ・カッターネオ研究序説」があった。また同時に助手に就任した林和宏（昭和五十二年、外大卒）は、一九五四（昭和二十九）年十月生まれ、東京外国語大学大学院を経て、論文に「パヴェーゼの詩法」があった。

こうしてイタリア語学科についに、語学・文学・事情の三講座が揃ったのではあるが、いわゆる不完全講座であり、なお問題点がいくつか残った。そのひとつは、語学講座に教授定員が欠けていたことであり、いまひとつは助手定員があったことである。これらについては後に改めて触れるが、一九九二（平成四）年四月からの「再編期」を迎えるまで、イタリア語学科は、比較的順調な「発展期」にあったと言ってよいであろう。

この間に、河島教官が長期在外研究のため、一九八〇年十一月から翌八一年九月まで、トリーノ大学その他へ赴いた。補塡する文学講座その他の授業には、西本晃二（東京大学教授）と長神悟（東京大学教授）の協力を得ることができた。前年四月、東京大学文学部にイタリア語イタリア文学専修課程が新設されたさいに、河島が講師として出向いた経緯もあったからである。

また、新しく設けられた、若手教官のための長期在外研究を利用して、高下教官も一九八八年度に一〇か月間、イタリアへ出張した。補塡する事情講座その他の授業には、主に堤康徳（昭和五十六年、外大卒）があたった。

先に触れた、いわゆる不完全講座の問題点であるが、教官の定員増によって、一九八〇（昭和五十五）年四月に、事情講座は上村助教授と高下講師の二名になった。そして一九八三（昭和五十八）年四月に、高下が助教授に昇任した（専任講師が三年の教歴を経て、研究業績があれば、助教授への昇任は一般的である）。こうして事情講座においては、上村助教授と高下助教授が並存し続けるのである。他方、上村教官の場合には、教官の定員増に伴って、一九七九（昭和五十四）年四月、助教授に昇任したのだが、その後、一〇年近くの教歴を重ねて、研究業績も多数あるのに教授への昇任が叶わなかった。

このような人事をめぐる一種の不公平は、いわゆる不完全講座の場合に、まま生じてきたのであり、なるべくすみやかに是正されるべき事態であった。簡単に言って、上村教官が教授に昇任できないのは、秋山教官が事情講座の教授ポストを借用していたからである。しかし、秋山教官の場合は、秋山教官が奥野教官の後を継いで事情講座の教授ポストに就かなければ、語学講座に教授ポストが存在しないため（それゆえに不完全講座なのである）、永遠に教授に昇進できないという、さらに大きな不公平に晒されてしまうのであった。

事の起こりは、旧制東京外事専門学校から新制東京外国語大学への移行のさいに生じたという。かえりみれば「発足期」の第二部第二類（イタリア専攻）において、最初の教授は柏熊宜三であり、柏熊教官は事情講座の教授であった。というよりも、事情講座こそすべてであって、語学も文学も、あるいは政治も経済も美術でさえも、事情講座のなかに含まれると考えていたふしがある。ついで奥野教官は何のためらいもなく事情講座の教授を承け継ぎ、語学や文学や美術の授業まで行ったのである。イタリア語が読めるというだけの理由において。

いわゆる不完全講座の、先に触れかけた、いまひとつの問題点は、イタリア語学科にあった助手のポストである。本学において、助手がいわゆる事務助手ではなく、講師に近い身分であることは、週三コマの授業を分担してきた現実からも明らかであろう。にもかかわらず、助手には代々、事務や雑務が押し付けられてきた。

したがって、定員削減――これ自体は容認しがたいことであるが――にさいして、本学が助手のポストを充ててきたのは、当然の措置ではあった。そして第七次定員削減――一九九〇（平成二）年度実施――にあたり、イタリア語学科イタリア語学講座の助手がこれに充てられたのである。

委細は省くが、一九八〇年四月、定員増に伴い、就任した林和宏助手がこのポストにあって、上位定員に欠員ができないかぎり、林教官は助手であり続けなければならない、という側面も有していた。折から、臨時増募による教官ポストの配置があったため、そのうちの助教授一名を、イタリア語学科に配当させることになった（一九八七年二月九日における学科・系列代表者会議の合意）。こうして一九九一（平成三）年四月、林和宏が専任講師に昇任したのであった。

なお、臨時増募は学生数の変動によって生じた一時的措置である。それゆえ「臨時増募終るに伴う返還の際には、イタリア語学科の現定員を削減しない」という趣旨であることが確認された（一九九〇年五月九日、第二五四回、外国語学部教授会議事要旨）。

ともあれ、イタリア語学科が発展に発展を重ねたこの時期の終わりである、一九九二（平成四）年三月末日をもって、秋山余思（語学担当）が退官した。

また同時に、長年にわたり外国人教師として会話を主体とする授業の指導にあたってきた、客員教授マリーザ・ディ・ルッソが帰国のため、ひとまず退任した。なお、ディ・ルッソ教官は学生たちの研究旅行や留学のために助力を

惜しまなかった。加えて、ナポリ東洋大学との交流協定（一九八一年に坂本是忠学長締結、一九九八年に中嶋嶺雄学長改定）やヴェネツィア大学との交流協定（一九八八年に長幸男学長締結、一九九一年に原卓也学長改定）を実現するためにも尽力した。

4　再編期　一九九二年以降

組織の変遷

ここでは主にイタリア語学科がどのような変遷を遂げつつあるかを略記しておく。

一九九二（平成四）年四月、大学院に地域文化研究科博士課程（前期・後期）が設置された。その前提として、従来の外国語学研究科（イタリア語学科の場合は、ロマンス系言語専攻）と地域研究研究科（イタリア語学科の場合は、ヨーロッパ地域コース）が統合された。したがって、従来の修士課程は、博士前期課程と一時的に並存することになった。これによって、本学においても博士後期課程へ進む道がひらかれたのである。

他方、外国語学部は、一九九五（平成七）年四月に、七課程、三大講座へ改組された。これを機に、従来のイタリア語学科はなくなり、欧米第二課程へ含まれることになった。すなわち、欧米第二課程として、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語の四専攻語がまとめられたのである。と同時に、従来の語学科は、三種類の大講座、つまり言語・情報、総合文化、地域・国際という三つのコースへ再編されたのである。

教授陣と教育研究態勢

一九九二（平成四）年三月、秋山余思教授の退官に伴い、後任（言語専攻）人事の選考にあたったが、適格者を見出すことができなかった。そのため、同年度は、かねてから言語関係の非常講師を担当していた鈴木信五（東京音楽大学助教授）に加えて、長神悟（東京大学教授）と糟谷啓介（一橋大学助教授）にも助力を仰いだ。そして、さらに公募を行って、協議を重ねた結果、翌九三年四月、山本真司（一九八五年、外大卒）が助手に就任した。山本真司は一九六二（昭和三十七）年十月生まれ。一九八八（昭和六十三）年三月に、東京外国語大学大学院修士課程を修了。

なお、一九九二年四月から二年間は、客員助教授として、ローマ大学日本語学科研究室勤務のジュリアーナ・カルリが来日した。その後は、再来日したマリーザ・ディ・ルッソを含め、マリアドナータ・コンスタンティーニその他のイタリア人が、学生の指導にあたっている。

さて、一九九五（平成七）年四月、外国語学部が七課程、三大講座に改組されたさい、イタリア語学科は欧米第二課程に入り、専任教官は次のごとく三大講座に属することとなった。

言語・情報講座（山本助手）。

総合文化講座（河島教授、上村教授、林講師）。

地域・国際講座（高下助教授）。

その後のイタリア語教授陣の異動を述べるならば、一九九六（平成八）年三月に河島英昭が退官して名誉教授になった。同年四月に高下一郎が教授に、山本真司が専任講師に、それぞれ昇任した。また一九九八（平成十）年四月に、上村忠男が大学院国際文化講座教授になったため、外国語学部総合講座欧米第二課程イタリア語教授は併任となった。そして同年四月に、林和宏が助教授に昇任した。

最後に、再編されつつある三大講座（欧米第二課程イタリア語）について付言しておく。たとえば、教官人事に関して、先に述べたごとく、イタリア語学科のように、小規模な不完全講座にあっては、上位定員に欠員が生じないかぎり、昇任人事が円滑に進まなかった。しかし大講座制へ再編されたことによって、従来のごとき甚だしい不公平は是正されてゆくであろう。

他方で、学生の側に身を置いてみた場合、往時に痛感されていた不合理は、このたびの再編によって改革され、克服されてゆくのであろうか。たとえば、高等学校を卒業したばかりの人間が――自分の不徹底な、漠然とした志願によって、選んでしまったにせよ――いきなり狭い専攻語の枠に閉じ込められてしまい、結局は、定かな脱出口を見出しえずに、所定の単位だけを集めて卒業することになりがちなシステムは、過去のものとなったのであろうか。

本学の「再編期」は移転も控えて、おそらく、まだ始まったばかりの段階にある、と考えてよいであろう。そしてこの「再編」もしくは「改変」の特徴は、圧倒的に内なる学生たちの意志が欠落している点にある。あるいは、学生の側の批判精神が薄い時期の産物になりつつある、と言ってもよい。かつては、日夜、延々と「団交」のなかで「カリキュラム問題」を語り合ったというのに。

それは必ずしもイタリア語学科の特殊現象ではなかったであろう。その証拠に、いわゆる「紛争」直後の一九七〇年代の初めには、本学全体においても改革論議が盛んであった。たとえば、東京外国語大学の場合、「専門学校の継承として狭義の語学（語術）教育を教育体系の中心に置いてきた点に根本的欠陥がある」と指摘している（「東外大改革準備委員会、答申案」九ページ）。

また、「本学の欠陥」も一〇項目にわたって述べられている。――手段としての語学と目的としての語学が明確に区別されずに、いずれもが中途半端なものとなっている。――語学と文学が雑居している。――本学の語学教育は一

般言語学の発展にほとんど反応を示してこなかった……等々である。このような指摘が過ぎ去った風景のものとは思いにくい。

しかし、同時に、東京外国語学校・東京外事専門学校・東京外国語大学の三代にわたって、伊語学科・伊語部・イタリヤ科・第二部第二類・イタリア科・イタリア語学科・欧米第二課程と名称を変えながらも連綿と承け継がれてきた、長い伝統を誇る本学イタリア語教育研究機関の重要性は、今後もますます確認され続けてゆくであろう。それにつけても、「大学史」の内に築かれてきた栄光が、多数の非常勤講師陣の犠牲的な協力の上に成り立ってきたことだけは、忘れてはなるまい。非常勤講師に対する劣悪な報酬制度は、改善されるべき最大の問題である。この半世紀、イタリア語関係で協力を惜しまなかった方々の氏名は別記のとおりである。

最後の最後に、一九九六（平成八）年四月、外国語学部に総合文化研究所が開設されたことを喜んでおきたい。海外事情研究所の開設（一九五四年）や語学研究所の開設（一九五九年）に比べて、あまりにも遅れた出発ではあった。けれども、たとえばこの新しい研究所に総合文化講座の共同研究室や共同図書館を整備するならば、かつてない成果をもたらす場となるであろう。先述した「紛争」直後の改革準備委員会「答申案」のなかには、教官と学生の意志疎通と相互批判の場を制度的に確立しようとするものや、教官の適任ならびに資格審査まで論ずる部分があった。

このように大学内の短所を剔抉して捨て去ろうとする議論は、今後もくり返されるかもしれない。しかしそれよりも、長所を補強し充実させることのほうが、はるかに効果的であろう。総合文化研究所の発展を願って止まない。たとえばまた、国内はもとより国外との文化交流も、この研究所の活動内に組み入れてよいであろう。本学がナポリ東洋大学およびヴェネツィア大学と交流協定を結んでいるのは、先に触れたとおりである。このうち、ヴェネツィア大学とは、留学生だけでなく、教官および研究者の交流も行っている。

この制度を利用して、本学からは沓掛良彦教授が、一九九一年二月、ヴェネツィア大学へ赴いた。逆にヴェネツィア大学から本学へ来たのは、ジャンカルロ・トレンティーニ教授と若手の研究者アンジェラ・カラッチョロ・アリコである。トレンティーニは心理学が専攻であったために、田島信元教授に受け入れ人になってもらい、河島、林の研究室でも大学院生やゼミの学生たちを交えて数度の話しあいを行った（一九九二年十一月）。またカラッチョロ・アリコ教授は近現代文学の専攻であったために、河島教官が受け入れ人となって、研究室での数度の会合のほか、カルリ、林、山本教官らの協力を得て、三三〇二番教室で公開講演会を行った（一九九四年二月）。滞在中は、両教授とも本学の国際交流会館を利用し、好評であった。

イタリアの大学と本学との交流協定は、ナポリ東洋大学とヴェネツィア大学とのあいだに結ばれているだけのため、ローマ大学やフィレンツェ大学その他とのあいだにも、同種の協定の結ばれることが望ましい。たとえば、フィレンツェ大学では日本語日本文学の教授ポストに、鷺山郁子（昭和五十二年、外大卒、五十五年同大学院修了）が就いているので、交流協定を結ぶのは比較的に容易であろう。ともあれ、あらゆる機会に、東京外国語大学のイタリア研究の名声が内外にいっそう響きわたることを願いつつ、擱筆する。

イタリア語非常勤講師一覧（年度順）

斉藤重孝（昭和二十五－三十年）
井出正隆（昭和二十九年）
窪田富男（昭和三十年）
坂本鐵男（昭和三十－三十一年）

下位英一（昭和三十一年）
山崎功（昭和三十一―三十四、四十五年）
吉浦盛純（昭和三十二―三十四年）
摩尋意善郎（昭和三十二年）
清水三郎治（昭和三十二年）
松本芳郎（昭和三十四―四十四年）
中村修（昭和三十五―三十八年）
星野秀利（昭和三十五―三十七年）
戸口幸策（昭和三十八―四十年）
金倉英一（昭和三十九―四十一年）
松浦保（昭和四十一―四十四年、四十七―四十九年）
友部直（昭和四十一―四十三年）
下村清（昭和四十二―四十三年）
赤沢寛（昭和四十三―五十四、五十六年）
竹内啓一（昭和四十五―四十六、五十七年）
清水廣一郎（昭和四十五―四十六、五十年）
佐野敬彦（昭和四十五―四十七年）
北原敦（昭和四十五―四十六年、六十二年）

山口浩一郎（昭和四十五－四十六年）
河野穣（昭和四十七－五十三年）
森田鉄郎（昭和四十七－四十九年）
重岡保郎（昭和四十七－五十二年）
濱谷勝也（昭和四十八－四十九、五十一－五十六年）
池田廉（昭和四十九、五十四年）
西村暢夫（昭和五十年）
清水純一（昭和五十年）
上村忠男（昭和五十年）
米川良夫（昭和五十一－五十二、五十四、五十六、五十八年）
平川祐弘（昭和五十一年）
永井三明（昭和五十一年）
大石敏雄（昭和五十一－五十二、五十四、五十六、五十八、六十、六十二、平成一、三年）
菅田茂昭（昭和五十二－五十五年、五十七、五十九、六十一年）
荒谷次郎（昭和五十三年）
藤澤房俊（昭和五十三－五十四年）
川岸貞一郎（昭和五十三、五十五、五十七年）
木村裕主（昭和五十三、五十五、五十七、六十一、六十三年）

田辺敬子（昭和五十三―五十六、五十八年）
堺憲一（昭和五十四年）
馬場康雄（昭和五十五年）
佐藤三夫（昭和五十五―五十六年）
高田和文（昭和五十五、五十七、五十九、六十一―六十三年）
カルロ・キエーザ（昭和五十五、五十七年）
鈴木信五（昭和五十六、五十八―六十、六十二―平成四、六―十年）
西本晃二（昭和五十六―五十七年）
長神悟（昭和五十六―五十八年）
ルチアーナ・キヌカワ（昭和五十六年）
渡辺（白崎）容子（昭和五十八、六十、六十二、平成一―三年）
ピーア・アッスンタ・アイロルディ（昭和五十八、平成二―五年）
コッラード・モルテーニ（昭和五十八、六十年）
若桑みどり（昭和五十八―六十一年）
岩本純（昭和五十九年）
竹山博英（昭和五十九―六十、六十二、平成一、五―六年）
アンナリーザ・ストラゾリエル・ザッリア（昭和五十九年）
鷲平京子（昭和六十―六十二、平成三―四年）

マーリオ・ファルミ（昭和六十年）
小野明子（昭和六十一、六十三、平成二、五、七－八、十年）
ジャンフランコ・グレーコ（昭和六十一年）
サルヴィオ・マリーノ（昭和六十二－平成一年）
堤康徳（昭和六十三－平成十年）
北村暁夫（昭和六十三、平成六年）
丸山優（昭和六十三年）
栗原優（昭和六十三年）
古賀弘人（平成一－三年）
村田真一（平成一年）
末常尚志（平成二年）
尾形希和子（平成四年）
糟谷啓介（平成四－八年）
大岡玲（平成四－五年）
望月紀子（平成五－六年）
コンチェッティーナ・ブッチ（平成六－十年）
小島友仁（平成七－十年）
芝田高太郎（平成七－十年）

小谷真男（平成九年）
石鍋真澄（平成九年）
ナンニーニ・アルダ（平成九、十年）
押場靖志（平成十年）
尾田泰彦（平成十年）
マリーア・ジュゼッピーナ・チェルッリ・イレッリ（平成十年）